

イヴァン雷帝とクールプスキー公の往復書簡試訳（Ⅱ）

栗生沢 猛 夫

（Ⅱ）イヴァン雷帝がクールプスキーに宛てた第一の書簡 （第一詳細版）（承前）

この頃までに汝らの頭目であるかの犬アレクセイ・アダーシェフがわが帝国の宮殿に仕えるようになっていた。わが若年の頃彼がいかにして露払の身から成り上がったのか、わたしは知らない。われらは高官らの間に上述の如き裏切行為のあるのを知ったので、この者を塵芥のなかから引き上げ、まったく忠義を期待して、彼を高官らと並ぶ地位につけたのである。一体われらが彼に、いや彼のみならず彼の一族全体に与えなかった名誉や富があるだろうか！これにたいしわたしはいかなる誠実な奉公を彼から得たであろうか。⁽¹⁾さらに続けて述べよう。わたしはその後シリヴェーストル司祭をわが霊の導きと魂の救済のために受け入れた。⁽²⁾彼が主の玉座の傍に立つ者として、己が靈魂を正しく保つてであろうと期待してのことであった。だが彼は天使とともに主の玉座の傍——そこでは天使らがうやうやしく身を屈めんと願い、また世の救いのために

- (1) 「塵芥」のなかから引き上げられたというアレクセイ・フョードロヴィチ・アダーシェフは実は地方（コストロマー）士族のオコリニク一門の出である。彼の父フョードル・グリゴリエヴィチ・アダーシェフは1548年侍従官となり、1553年にはボヤール貴族となった。アレクセイの方は1547年寝殿官、1555年には侍従官となったにすぎないが、ツァーリの信頼厚く、「選抜会議」の指導的人物の一人として改革政策を遂行した。また嘆願庁の長官でもあった。彼の兄弟ダニールに雷帝は直接言及していないが、彼も1559年に侍従官となり、軍事指導者として活躍した。
- (2) シリヴェーストルについては本稿（Ⅰ）-128頁、注(3)を参照。おそらくはノヴゴロド生れの彼がモスクワにやってきてブラゴヴェーシチェンスキー寺院司祭となった（府主教マカーリーの力添えで）のは、1542年から1547年にかけてのことであった。1547年頃からツァーリの帰依をうけ、影響力を強めていった。

いつも神の子羊が犠牲として捧げられ、しかもなお [この犠牲は] 決して尽きることがない——に立つという聖職者の誓いと按手の礼に違反した。彼は肉の身でありながら、自らの手でセラフィム⁽³⁾の奉仕を行うにふさわしき者とされた。ところが彼は狡猾にもこれらをすべて蔑ろにし、ただ初めのうちだけ、神の書物に従って正しく歩むふりをしたのである。わたしは神の書物に、善き教師には迷うことなく服従すべきであると記されているのを知り、彼に霊の助言を求めて自らの意志で聴き従ったのである。決して無知ゆえにそうしたのではなかった。だが彼は祭司エリのように⁽⁴⁾権力に有頂天となり、俗人と同様に徒党を組みだした。その後われらはロシア府主教区のすべての大主教と主教、また聖なる全教会会議を召集し、⁽⁵⁾その席上神の祈り人なるわが父全ルーシの府主教マカーリー⁽⁶⁾の前に、われらが若年の頃なしたこと、すなわち汝ら貴族にわたしが下した失寵について、また汝ら貴族のわれらにたいする反抗と過誤について、これらすべての事柄について、自ら赦しを乞うたのである。またわれらは汝らわが貴族と全人民の犯した過誤を赦し、今後一切これを想起しないことにした。かくしてわれらは汝らをすべて善き民とみなすことにしたのである。

だが汝らは己が以前の狡猾な慣習を捨てず再び旧習に舞い戻り、誠意をもってではなく狡猾な助言をもってわれらに仕え始めた。万事を誠実にではなく、悪意をもって行った。かくしてシリヴェーストル司祭とアレクセイも^{よしみ}誼を通じ、われらを分別なき者と考へ、密かに^{はかりごと}謀略をめぐらし始めた。このようにして彼らは靈魂についてではなく、俗事について相談を始め、また汝ら貴族全員を徐々に不服従へと導き、わが権力を奪って⁽⁷⁾反抗へと駆りたてた。彼らは

(3) ヤーウェに奉仕する六つの翼をもつ天使。

(4) 本稿 (I) -139頁参照。

(5) おそらく1549年2月の教会会議のこと。このときツァーリは高位聖職者や高位高官を前に、30-40年代の政治の混乱の責任を貴族らに帰し、諸問題を平和裡に解決することを命じたうえで、恩赦を約束した。

(6) ロシア府主教 (1542-1563) イヴァン四世をツァーリとして戴冠させ (1547年)、カザン征討を提唱するなど、雷帝の専制権力の強化に努め、そのイデオロギー的支柱となった。他方新たに50人もの聖人を列聖させ、雷帝の教会財産 (所領) 制限策に反対するなど、ロシア教会の精神的・物質的強化をもちかけた。

(7) 原文は「わが権力を汝らから奪って」とある。 с вас は с нас の誤りか。

汝らを名誉においてわれらに劣るところなき者とし、さらに下層のジエチ・ボヤールスキエ小貴族を名誉において汝らと並ぶ者となしたのである。このようにして彼らの悪事は徐々に増し加わり、かくて汝らにも世襲領や町や村が分配され始めた。それはわが祖父なる大君〔イヴァン三世〕の命によって汝らから没収された世襲領地であり、われらから奪って他人に与えてはならぬものである。それを彼らは資格もないのに、あたかも風の吹くまにまに方々に分配し、わが祖父の法に反したのである。⁽⁸⁾このようにして彼らは多くの者共を自陣営にひきつけた。その後彼らは一味のドミトリー・クルリャーチェフ公をわがシクリト会議に引き入れた。⁽⁹⁾彼は狡猾にも霊の導きのためと偽ってわれらに接近し、これを行うのも魂のためであって、邪念からではないと言うのであった。かくて彼らは一味とともに会議を悪党の集会とし、彼らの追随者の占めない地位は一つもなかったほどである。彼らはこのようにして万事においてその望みを達したのである。その後彼らはその仲間たちとともに、われらが父祖から受けついだ権力を奪い取った。汝らはわれらの恩寵のゆえに貴族とされておりながら、これにより〔さらに〕名誉と高い地位を得て尊敬されんと望んだのである。かくしてこれらすべてが汝らの手中に帰し、われらには何も残されなかった。万事が汝らの意のままに行われ、誰もが思う通りに振舞った。それから互いの友誼を通じてその地位を固め、全権力を意のままにし、われらの意向は一切きかず、

(8) シリヴェーストルとアダーシェフが国有地を「風の吹くまにまに」分配したという非難が何を指しているのか特定することは困難である。1550年のモスクワ近郊におけるいわゆる「1000人の小貴族にたいする封地の授与」は（かりに実現されたとしても）ツァーリ権力の強化につながるものであり、ツァーリにより非難される理由はない。いわゆる「貴族支配期」の土地政策の責任を「選抜会議」に押しつけようとしたことも考えられる。あるいはまた、ツァーリの許可なくして諸公の世襲領を修道院へ寄進することを禁じた1551年5月11日の有名な勅令にたいする違反をツァーリが咎めたのかもしれない。

(9) ドミトリー・イヴァノヴィチ・クルリャーチェフ。分領諸公（オボレンスキー諸公）の一員。イヴァン幼少の頃シェーイスキー家に一味し、1543年にはツァーリの寵臣ヴォロンツォーフ追い落としに参画した（本稿（Ⅰ）-154頁参照）。シリヴェーストル、アダーシェフらと協力関係に入ったのは、彼が貴族となった1549年頃であろう。1553年に雷帝が病床に臥したとき、彼は幼い皇子ディミトリーに最も遅れて宣誓した者の一人であった。1562年アダーシェフらとともに失寵を蒙り、妻子とともに出家せしめられた。その後間もなくツァーリの命令で殺された。

あたかもわれらなど存在せぬかの如くに、自身と助言者らの意向で万事を執り行い裁断した。たとえわれらが善き提言をなしても、彼らはそれを一切必要なこととはみなさず、逆に不必要なことでもそれを行い、反抗的で、醜悪なことを申し立てては、すべてが善事だと言って行ったのである！

以上のように外面的にも内面的にも、些細なとるに足らぬ事柄においても、また敢えて言うが食物や睡眠に関しても、万事われら自身の意志によることなく、彼らの思う通りに行われた。われらはあたかも幼児のままにいるかのようであった。はたして成人でありながら幼児であることを望まなかったからといって、理性に逆らうことになるのだろうか。事情はその後も変らなかった。当時われらが彼〔シリヴェーストル〕のもっともつまらぬ助言者の一人に反対の意見を言わなければならなくなると、それは汝の悪魔の中傷の書状に記されているように、不敬なことのようにみなされた。逆に彼の助言者のうちのもっともつまらぬ者が、われらにたいし主人や兄弟にたいするようではなく、もっとも小さな者にたいするかの如くに猛り狂って不遜な言葉を吐きつけたとしても、それはすべて敬虔なことのようにみなされた。われらにたいし少しでも耳を傾け、穏やかな態度でのぞむ者があれば、その者には激しい苦難と迫害が加えられた。逆にわれらを憤らせ、何とかして抑圧を加えようとする者には、富と栄光と名誉とが与えられた。もしされるがままに耐えていなかったなら、わが霊には滅びが、王国には荒廃がもたらされたであろう！このようにわれらは激しい迫害と抑圧の下におかれていた。彼らの悪行は日毎に、それどころか時々刻々甚だしくなっていた。われらに逆らう者が増え、従順で温和な者は減っていった。当時輝ける正教とはこのようなものであった！われらが日々の生活において、旅の途上で、休息の最中に、教会での礼拝中に、その他日常のあらゆる事柄に際して蒙った迫害と抑圧とを、誰が事細かに数えあげることができるだろうか。当時われらを取囲む状況はこのようなものであった。彼らはそれが神のためであると主張した。わが靈魂のためにかくの如き抑圧を加えるのであって、決して邪念からではないと言うのであった。

われらが神の思し召しにより、正教キリスト教世界防衛のため全正教キリス

ト教徒軍の十字架の旗を掲げて、神を知らぬカザンの異教徒を征討すべく進撃したときも同様であった。⁽¹⁰⁾われらは神の計り知れない恩寵により異教徒にたいし勝利を博し、全正教キリスト教徒軍とともに無事帰還した。汝が殉教者と呼んだ者たちがこのときわたしに示した善意について、一体どう言えばいいのであろうか。彼らはわたしをあたかも捕虜のように船に乗せ、わずかばかりの手勢をつけただけで、神を知らぬ邪教徒の地の只中を連れだしたのであった！もしいと高きところにいます全能の神の右手が卑しきわが身を守られなかったなら、わが生命は必ずや奪われていたであろう。汝が弁護しようとした者らのわれらにたいする善意とはかくの如きものであった。われらの靈魂を異邦人の手に渡そうと躍起になることが、われらのために生命を擲つことだというのである！⁽¹¹⁾

われらが帝都モスクワに到着したときもまた同様であった。このとき神の憐れみがわれらの上に増し加わり、われらに世嗣が生れた。わが子ディミートリーである。⁽¹²⁾だがほどなくしてわれらは人の世の常ながら病にかかり、ひどく衰弱してしまった。そのとき汝が善意の人々と呼んだ者らがシリヴェーストル司祭や汝らの頭目アレクセイ・アダーシェフとともに、さながら酔漢の如くにわれらに叛旗をひるがえした。⁽¹³⁾彼らはわれらをもはや死んだものと思い、わが父とわれらにたいしわが子以外に他の君主を求めない、と自ら十字架にかけて誓っていたにもかかわらず、われらの恩寵と己の靈魂の〔救い〕を忘れて、わ

(10) 1552年のことである。

(11) イヴァンの以上の如き記述を根拠に一部の史家は、彼はカザン遠征に不承不承従軍し、作戦そのものにおいてもほとんど意味のある役割を果たさなかった、とする見解を表明したが、これは明らかに誤りである。ここではカザン征討後の帰還の時期と方法が問題になっているにすぎない。イヴァンがカザン遠征に「情熱」を燃やしていたことにはほとんど疑いがない。これはクールプスキー自身がその『モスクワ大公の歴史』で証言する通りである。彼は同書で、イヴァンがカザン征討後、翌年の春まで現地に留まるよう説得するクールプスキーらを斥けて、妻の兄弟ら（ザハリン家）の助言に従って急ぎ帰国したことを伝えているが、むしろ上の記述はクールプスキーのこの証言と関連するだろう。

(12) 1552年10月のことである。本稿（Ⅰ）-146頁、注(104)を参照。

(13) 1553年のツァーリ罹病の際の皇子への宣誓拒否事件。ツァーリはこれを深刻な「反逆」と考えた。本稿（Ⅰ）-134頁、注(60)、146頁を参照。

これらの遠縁のウラジーミル公を即位させようと欲した。そして彼らはウラジーミル公を即位させた後、神より授かったわが幼な子をヘロデ王よろしく殺害せんとしたのであった。(実際彼らが殺害しないということがあろうか!) というのも^{いにしえ}往古の書物に次のように記されているからである。それは世俗の書物ではあるが、書かれていることは正しい。「^{ツァーリ}王は別の^{ツァーリ}王に^{めか}額ずかない。一方が死ねば、他方が支配する。」⁽¹⁴⁾われらが存命中に己の臣民からうけた善意が上述の如くであったとするならば、われら亡き後は一体どうなることだろう! だが神の憐れみを得て、このときもわれらは意識をとり戻し、全き思考力を回復したので、彼らの謀略は水泡に帰した。⁽¹⁵⁾ところがシリヴェーストル司祭とアレクセイ・アダーシェフはその後も悪巧みを止めず、[われらを]一層激しく抑圧し、われらに善意を抱く者らにたいしても様々な方法で迫害を加えんと思ひめぐらした。一方ウラジーミル公にたいしては、何事であれ彼の思い通りに計らい、逆にわが皇妃アナスターシアには激しい憎悪をもって対し、彼女をあらゆる不信仰な皇妃らに比べる始末であった。⁽¹⁶⁾いわんやわが子供らのことを心にかけることなど一切なかったのである。

(14) イヴァンはこれを、15世紀からロシアに知られるようになったセルビア語版の『アレクサンドル物語』から引用している。『アレクサンドル物語』は16世紀には、他の世俗諸文献とともに非公認文献とみなされていたので、イヴァンはわざわざ「世俗の書物ではあるが、……正しい」と断わっている。

(15) 以上に記された1553年の宣誓拒否事件はいわゆる『皇帝の書』の1553年の項への付記にとくに詳しく描かれている。それによると、幼き皇子ディミートリーへの宣誓を拒否して(その理由としてあげられたのは、ディミートリーが即位した場合、実権はその母の一族ザハリン家に握られる、というものであった)、ウラジーミル・スタリツキー公を擁立しようとした者は、シリヴェーストル、フョードル・アダーシェフ(アレクセイ・アダーシェフではない!), クルリヤーチェフ, パレツキー, フーニコフらであった。従来研究者の多くはこの事件を重視し、雷帝と「選抜会議」の関係悪化の決定的契機と考えてきたが、『皇帝の書』の付記の信憑性についてはその後疑義も出され、付記の記述が傾向的なものであることが明らかになってきた。訳者はこの事件そのものを否定する必要はないと考えているが、雷帝の記述があくまでも当事者のものであることを忘れるべきではないと思っている。ここでさしあたり指摘すべきは、雷帝が上で非難しているアレクセイ・アダーシェフは1553年には、その父フョードルとは異なってイヴァンを支持する立場に立っていたと考えられることである。なおこの事件については、邦語では石戸谷重郎「イヴァン雷帝とウラジーミル=スタリツキー侯」(『奈良文化女子短大紀要』第15号, 昭和59年)を参照のこと。

さらにその後昔からの裏切者たるかの犬ロストフのセミヨン公は、己が裏切の習いに従って、われらの^{ドゥーマ}会議〔の審議内容〕をリトワの使節パン・スタニスラフ・ダヴォイナとその一行に洩らし、われらとわが皇妃と子供らのことを悪し様に罵った。彼はわれらの恩寵により^{シクリトストヴォ}議員身分に取り立てられたのであって、決して己の才知によるものではない。われらは彼の悪事を探り出したが、彼にたいする処分は寛大に止めた。⁽¹⁷⁾だがその後シリヴェーストル司祭が汝ら悪しき助言者らとともに、この犬に特別の庇護を与え、あらゆる便宜を計り始めた。それも彼一人ではなく、彼の一族全員にたいしてである。かくてこれ以後すべての裏切者がわが世の春を謳歌することになる。逆にわれらはこのとき以来ひどい抑圧に苦しむことになった。そして汝も彼らの仲間の一人であった。汝らがクルリャーチェフとともにシツキーの件に関してわれらを裁こうとしたことはよく知られている。⁽¹⁸⁾

- (16) シリヴェーストルらのアナスターシアにたいする憎悪がいかなるものであって、その原因が何であったかは興味深い問題であるが不明である。（これについてはさらに後述108頁参照。）イヴァンは後に、クールプスキーらが彼女をビザンツのエウドキア皇妃に準えていると記している。後述135頁参照。
- (17) セミヨン・ロバノフ-ロストフスキー公のポーランド使節ドヴォイノとの秘密の接触は1553年夏のことであったと考えられる。（彼をこのような行動に走らしめた原因の一つは1553年の宣誓拒否事件であった。このとき彼はシチェニャーチェフ、セレブリャンヌイ、プンコフ-ミクリンスキー公らとともに反雷帝陰謀に加わった、と『絵入り年代記集成』の付記は伝えている。）翌1554年夏彼は息子とともに亡命を企てるが、失敗してしまう。同年秋ポーランドに派遣されたロシア使節には、セミヨン公に関する問い合わせがあった場合、彼は「愚かであるがゆえに動揺し、すべての外国人と一体となって君主のことで不適切な言葉を吐いた」と答えるよう指令が出ていたという。彼は結局反逆罪で死刑を宣告されたが、聖職者の執りなしでベロオーゼロへの流刑に減刑された。
- (18) シツキーの件とはおそらく『イヴァン第二書簡』中のイヴァン自身の次の言と関連がある。すなわちイヴァンは述べている。「はたしてわたしに何の罪があって、プロゾロフスキーの150チェチが〔汝らにとってわが〕子フォードルよりも貴重であったのか。……汝らはシツキーとプロゾロフスキーらの件を裁くにあたって、いかにわたしを非難したのであったか。」ここではおそらくヤロスラヴリ郡の世襲領主であったプロゾロフスキーとシツキーの間の土地をめぐる紛争が問題となっている。シツキーはその際皇妃アナスターシアとの姻戚関係を利用して（ヴァシーリー・アンドレーエヴィチ・シツキーは皇妃アナスターシアの姉妹の一人と結婚していた）、皇子フォードル（1557年に生れたばかりであった）（とおそらくはツァーリその人）を楯につかったと考えられる。あるいは、プロゾロフスキーの土地が皇子フォードルのた

同様にドイツ人にたいする戦争が始まったとき——これに関しては後で詳しく述べよう——シリヴェーストル司祭は汝ら助言者と一緒になってこの件でわれらを激しく非難した。⁽¹⁹⁾そしてわたしと皇妃と子供らがわれらの罪ゆえに病にかかるや、彼らはそれがすべて彼らゆえに、すなわちわれらが彼らに服従しなかったがゆえに起った、と主張したのであった。モジャイスクから病身のアナスターシア皇妃とともに帝都〔モスクワ〕に戻ろうとしたあの辛い旅を思い出さずにおられるだろうか。⁽²⁰⁾ たった一語の不適切な言葉のゆえであった！⁽²¹⁾ 祈禱をささげ、聖地をめぐる、魂の救いと肉体の健康またわが身とわが皇妃と子供らの全き安寧のために聖所に寄進を行い、誓いをたてること——われらはこう願ったが、汝らの狡猾な策略によりその機会はまったく与えられなかった。あのときにはわれらの健康のため医者の治療をうけることなど考えられもしなかったのだ。

このようにわれらは大いなる悲嘆のうちにあった。汝らが人間にあるまじき方法でわれらに課したこのような重荷はわれらには耐えがたかった。それゆえわれらはかの犬アレクセイ・アダーシェフと彼の助言者全員の裏切行為を調査し、わが怒りを彼に顕わした。だがそれも寛大にであった。すなわち〔彼らを〕死罪にではなく、各地への流刑に処したのである。⁽²²⁾ 他方シリヴェーストル司

めにツァーリによって没収され、この件に関しシツキーがフォードルを支持したと推測する者もいる。いずれにせよ本書簡の記述から判断するならば、クールプスキーはクルリャーチェフとともにプロゾロフスキーの側についていたと考えられる。

(19) リヴォニア戦争（1558—1583）が始まったときのことである。ここで言われている衝突は外交路線をめぐるものであると考えられるが、これについては後述注(46)、(47)を参照。

(20) 1559年10月雷帝一家がモジャイスクにあったとき、彼の下にリヴォニアによる休戦（1559年5月—11月の6ヶ月間の休戦）条約違反の知らせが入った。（この条約はおそらくアダーシェフやシリヴェーストルらの献策で結ばれたものであった。）ツァーリは道路事情がよくないにもかかわらず、急遽モスクワへむけ出立しなければならなかった。その帰路、雷帝の告発によると、皇妃の病は悪化し（翌年亡くなつた）たのであった。

(21) ここはおそらくアナスターシアにたいするシリヴェーストルらの憎悪の原因に関わる記述だと思われるが、このおそらくはアナスターシアの「一語の不適切な言葉」が何であったのかは不明である。フェンネルやシュテーリンはここを「一語の小さな言葉のゆえに彼らは彼女を無価値な女とみなした」と訳している。

祭は己が助言者らが遠ざけられたのを知るや、それを理由に自ら進んで隠遁してしまった。われらは彼を祝福して去らせたが、それは〔自ら〕恥じるところがあったからではない。彼がわれらに常に仕えながら悪を働き、己が狡猾な習いからわれらを軽んじたことで、この世ではなくかの世において、神の子羊の前で裁きがなされるようにと望んだからである。⁽²³⁾ かの世では、わたしが霊と肉において彼にいかにか苦しめられたかについて、裁きが得られるものと期待している。それゆえわたしは彼の子供も今日に至るまで平穩のうちに過ごすことができるよう許した。⁽²⁴⁾ ただわれらの面前に現れることは禁じられた。一体誰が汝のように愚かにも司祭に服従すべきだ、などと主張するであろうか。このような主張をするのも、汝らが教師にいかにか従うべきかに関するキリスト教の修道院規定をまったく理解していないからだ。汝ら自身耳が鈍くなっており、未熟なために教師を必要としている。汝らは固い食物ではなく、乳を必要としているのだ。だからこそこのように主張するのだ。⁽²⁵⁾ このゆえにこそわたしは上に述べたように、シリヴェーストル司祭にいかなる危害も加えなかったのである。わが支配下にある俗人に関しては、われらは彼らの裏切行為に応じて処分した。最初われらは何人も死罪に処すことはなかった。彼らの徒党に加わらなかったすべての者には彼らから離れているよう、将来とも彼らに近づくこと

(22) 「選抜会議」の主要メンバーの失脚は60年代初頭のことである。アレクセイ・アダーシェフは1560年夏リヴォニアに派遣され、その後ヴィリヤン（フェリン）奪取後その軍司令官の一人に任命された。彼はさらにユーリエフ（現タルトゥ）に流され、間もなく死亡した。クールプスキーはその『歴史』で上の一連の過程を（少くともフェリンへの任命以降を）ツァーリによるアレクセイの処罰ととらえている。彼の死は、クールプスキーによれば「熱病」によるものであったが、雷帝はこれを自殺と疑い、調査を命じている。アレクセイの兄弟ダニールも数年後処刑された。またクルリャーチェフは1562年末家族とともに出家せしめられ、後に処刑された。クールプスキー自身の「失脚」については、そもそも彼が失脚したのかどうかも含めて議論のあるところであるが、1562年8月のネヴェリの敗戦、1563年3月のユーリエフへの派遣などが彼の運命における転機であったことは間違いない。

(23) クールプスキーの『歴史』によればシリヴェーストルは白海のソロヴェツキー修道院に流された。

(24) アンテーミーという名の子であったが不詳。

(25) ヘブル5：11-12。原文では「主張する」の主語は三人称単数になっているが、上の如く理解した。

のないように命じた。この禁令を出して後、われらは十字架に接吻してこれを確認した。だが汝が殉教者と呼んだ者たちとその一党はわが禁令に従わず、十字架の誓いを破り、裏切者との関係を断たなかった。それのみならず彼らは、裏切者らが以前の地位に復帰し、われらにたいし一層悪質な陰謀を企てることができるようにと彼らに加勢し、ありとあらゆる策略をめぐらし始めた。さらに彼らの悪意は抑えがたく、理性も頑であることが明らかになったので、罪ある者らはその罪状に応じて然るべき裁きをうけたのである。このこと、つまり汝らの意志に従わなかったことが、汝の考えでは「悟りながら理性に逆らう者となっている」ことになるのであろうか。だが汝ら自身黄金のわずかな輝きに揺れ動く宣誓違反者の定まらぬ良心をもっている。それゆえ汝らはわれらにも同様のことを推奨しようとしている。だからわたしはこう言おう。ああこれはユダの呪われた欲望ではないか！神よ、わが霊と全正教キリスト教徒をこの欲望より守り給え！ユダが黄金のためにキリストを裏切ったように、汝らもこの世の楽しみのために正教キリスト教と己の君主であるわれらを裏切り、己が霊のことを忘れて、十字架の宣誓を破ったのである。

それ〔処刑〕が教会で行われたと汝は言うが、それは嘘である。またすでに記したように、彼らは己の罪ゆえにその罪状に応じて処罰されたのであって、汝が言うようにではない。汝は裏切者と姦通者を殉教者と呼び、彼らの血を勝利の聖なる血と、またわれらに反抗した者を強者と呼んだが、それは正しくない。汝はまたわが変節者らを軍司令官と呼び、彼らがわがために行った善行と犠牲的行為について語るが、事の真相はすでに記した如くことごとく明らかになっている。汝もこれを根も葉もないことだとは言まい。彼らの裏切は全世界に知れわたっているからだ。もしお望みなら、汝は蛮人からこれを聞くこともできよう。またわが国で交易し、外交使節の一員として訪れる者のうちにこれらの悪行の目撃者を見出すこともできよう。だがこれも過去のことだ。今日汝の一味は皆あらん限りの富と自由を享受し、ますます豊かになっている。彼らの過去の悪事が問題にされることはなく、彼らが以前手にいれた財産と名誉はそのままになっている。

さらに何があったであろうか。汝らは教会にたいし立ちあがり、非道の限りをつくしてわれらを迫害し続けた。キリスト教徒の迫害と抹殺のため、あらゆる手段で異教徒を結集し、われらにけしかけようとした。すでに述べたとおり、汝らは人間に怒りをむけることによって神に戦いを挑み、教会を荒らしているのだ。⁽²⁶⁾ 迫害に関しては神の使徒パウロが次のように述べている。「兄弟たちよ、もしわたしが今なお割礼を宣べ伝えていたなら、今だに迫害されることがあるだろうか。[もしそうしていたなら] 十字架のつまずきはなくなっていたであろう。だがこれを扇動しようという者は、取り除かれてしまえばよいのだ！」⁽²⁷⁾ 当時十字架の代わりに割礼が求められていたとすれば、今日汝らには君主の支配に代わって、己の勝手気儘な支配が必要なのである。だが今〔汝らには〕自由があるではないか。それなのになぜ、今なお迫害を止めようとするのだろうか。

汝はわたしが癩病人の良心をもち、悟りながらも逆らう者となっている、と考えた。だがその意味は以上に詳しく述べられたことから汝には十分に明らかになっただろう。一体神を知らぬ民について汝が語る場所は何であろう。汝自身己が悪魔の欲望に匹敵するものを世界中のどこにも見つけることができないであろう。また汝が強者、軍司令官、殉教者と呼んだ者たちが真実どう形容すべき存在であったのかも、すべて明らかである。彼らは汝が述べるような者ではない。むしろ彼らはトロヤの裏切者アンテノールとアイネアースに似ている。⁽²⁸⁾ 汝は多くを捏造し、偽っている。彼らの善行と犠牲的行為についてもすでに述べられた。彼らの中傷と背信は全世界に知れわたっている。

わたしは光を闇に変えようとしているのではない。甘きを苦いと言いくるめているのでもない。だが下僕が支配するのが光であろうか。甘いことであろうか。神から授かった君主の支配が闇で、苦きことなのであるか。これについ

(26) 本稿（Ⅰ）-122頁。

(27) ガラテヤ5：11-12。

(28) トロヤの英雄アイネアースと賢者アンテノールは「トロヤ伝説」の後代の版では祖国の裏切者とされている。ロシアでは16世紀初頭に『トロヤの歴史』の（ラテン語よりの）翻訳が現われた。

てはすでに言葉を尽くして述べておいた。汝は己が悪魔の書状のなかで様々な表現を用いてはいるが、実はただ一つのことを書いているにすぎない。下僕が君主を差しおいて支配することを汝は称えているのだ。これにたいしわたしは人々を真理と光に導こうと懸命に努めている。三位一体において称えられる唯一の真の神とこの神から授けられた君主を、彼らが認識することのできるようにである。また帝国を崩壊に至らしめる内戦と頑な生活を止めるようにである。はたして悪を断ち、善を行うことが苦き闇なのであろうか。これこそが甘き光ではないだろうか。臣民がツァーリに服従しないのであれば、内戦が止むことは決してない。だが自分のために奪い取ることを、これこそが悪であろう！汝は自ら何が甘くて光なのか、何が苦くて闇なのかを弁えずに、他人を教えている。それとも善行を止め、内戦と不従順によって悪を働くことが甘き光なのであろうか。だがこれが光ではなく闇、甘いのではなく苦いのであることは誰の眼にも明らかだ。

わが臣民がわれらの前に犯した罪過と彼らの憤怒について。これまでルーシの支配者は誰からも問い質されることはなかった。彼らは臣民を恵むも罰するも自由であり、臣民との紛争で何ものかに裁かれることもなかった。ここで彼らの罪について語るべきであるかもしれない。だがそれについてはすでに記された。汝は空しきことを口走るギリシア人のように、死すべき人間を〔キリスト教徒の〕指導者と呼んでいる。ギリシア人はアポロ、ディオス、⁽²⁹⁾ゼウスや他の多くの醜悪きわまりない人間どもを神としているのである。だが神学者と呼ばれるグレゴリオスはその著述のなかで厳かに次のように記している。⁽³⁰⁾

(29) ディオス (Дий) はゼウスのことか。ここでは別の存在と解されている。

(30) 以下の引用はナツィアンツのグレゴリオス (329/330~389/390) の説教からのもの。

(Fennell, 107 - 108 ; Stählin, 153 - 154 ; Переписка 395を参照), ここでは次のようなギリシア神話中の神々 (とその故事) に言及されている。ゼウスの誕生の次第とクレタにおける養育, フリギアにおけるレア=キュベレー崇拜, ディオニュソスの誕生—セメレーの懐胎と胎児のゼウスの太腿への縫いこみ, アテーナーのゼウスの頭からの誕生, テーバイにおけるディオニュソス崇拜。マケドニア (ラケダイモンの誤りか) の若者らが崇拜したというのはアルテミスのことと思われる。さらに地下の冥界の女神ヘカテー, レバディアの神託所で名高い英雄トロポーニオス, エジプトの神イシスとオシリスの名が見える。

「クレタの裁定者にして迫害者ディオス〔ゼウス〕の誕生や隠匿は偽りである。神〔ゼウス〕の泣き声を、子を憎む父神〔クロノス〕に聞かれないようにと若者たちがあげた声も、騒音や武装しての踊りも——というのも石が呑み込まれたのに、幼児が泣き叫んだなら、それは災いとなるからだ——同様に存在しなかった。またレアーをめぐって人びとが狂ったようになって行ったフリギアの去勢や笛ふき、拍手も事実ではない。ディオニュソスとその月足らずの誕生も、以前〔ゼウスの〕頭がそうであったのと同様に、このとき傷められた太腿も存在しない。彼を崇拜するテーバイ人の狂気もセメレーが懇願せる雷霆も、女神に栄光を帰せんとしてわが身を傷つけて苛んだマケドニアの若者たちも存在しない。ヘカテーの陰うつな恐ろしき姿はどこにあるのか。トロポーニオスの各地で行われたという拝礼と神託はどこにあるのか。オシリスの苦痛も、エジプト人が尊ぶ他の災難も、イシスの恥辱も存しないのだ。これらの神々には常にそれぞれ特別の犠牲が捧げられ、特別の祝祭がある。だがいずれにも共通するのは皆邪神だということだ。善行を通じて造物主に栄光と誉を帰せんがためにあたうる限り神に似せて創られた者が、内なる人を貪り食い、滅ぼし尽すあらゆる情欲に身を任せるのは悪しきことである。だが神々を情欲の奨励者として立て、罪過の責任を回避せんとするのみならず、むしろそれが己の崇拜する神の業であり、神が責任をとるだろうと考えることも大いに誤っている。」ギリシア人の忌むべき行為は他にも沢山ある。彼らの神々はその情欲ゆえに、すなわち淫蕩、憤怒、放縦、淫欲ゆえに崇拜されている。彼らのうちの誰かが何らかの情欲の虜となったとき、彼は己の情欲にふさわしい神々を選び、それを信仰したのである。淫蕩にはヘラクレス、憎悪と敵意にはクロノス、憤怒と殺人にはアーレース、楽器を手に歌う踊るの大騒ぎにはディオニュソスという具合である。他にも様々な神々が情欲ゆえに崇拜された。汝も己が欲望においてこれらの者によく似ている。汝は朽つべき人間をあえて指導者と呼び、栄光を畏れず、大胆にも誹謗している。ギリシア人が己の情欲にふさわしい神々を崇拜するのと同様に、汝も己の裏切行為にふさわしく裏切者を称えている。彼らの隠れた情欲が神として崇拜されているのと同様に、汝らの秘密の裏切も正義と

考えられている。これにたいしわれらキリスト教徒は三位一体の神と称えられるわれらのイエス・キリストを信じている。使徒パウロが語る通りである。「われらには新しき契約の仲介者、キリストがあられる。彼は天にあって大いなる者の御座の右に座し、われらの肉の幕を取り除き、常にわれらを教え、進んで彼らから苦しみを受け、己が新しき契約を血にて浄められたのである。」⁽³¹⁾同様にキリストも福音書のなかでこう述べている。「汝らは教師とよばれている。だが汝らの教師は一人、キリストである。」⁽³²⁾われらキリスト教徒は三位一体の神こそが守護者であることを知っている。われらはこの神をわれらの神イエス・キリストを介して認識するに至った。われらはまた神なるキリストの母となる栄誉を与えられたいとも浄き聖母が、キリスト教徒の執りなし手であることを知っている。さらに天の全軍勢と大天使や天使らもわれらの守護者である。それは大天使ミハイール⁽³³⁾がモーセとヌンの子ヨシュアおよび全イスラエルの守護者であったのと同様である。大天使ミハイールはまた、新しき恩寵の信仰の念において並ぶ者なきキリスト教徒の^{ツァーリ}皇帝コンスタンティヌスにとっても守護者であった。その姿は見えなかったが、軍勢を導き、敵をすべて打ち破り、それ以後今日に至るまですべての敬神の^{ツァーリ}皇帝たちに加勢しているのである。かくてわれらにはミハイールやガヴリールその他すべての肉にあらざる霊的力が守護者としてついでいる。さらにわれらには預言者、使徒、僧正、殉教者、一団の尊師たち、懺悔聴問僧、男女の無言僧ら神への祈禱者がいる。以上がわれらキリスト教徒の守護者である。これにたいし朽つべき人間のことを一体いかにして守護者と呼びうるのか、わたしには分らない。単にわが臣民にそのような資格がないというのではない。われらツァーリですら守護者と呼ばれるべきではないのだ。というのもたとえわれらが黄金と真珠のちりばめられた緋袍を纏っているとしても、われらは朽つべき身であり、人として弱い存在であるか

(31) ヘブル 8 : 1, 9 : 20, 22, 10 : 20, 12 : 24

(32) マタイ 23 : 10 (ただし聖書の如く「呼ばれてはならない」ではない。否定の не が欠如している。)

(33) 天の軍勢を率いる大天使。後に出てくるガヴリール(ガブリエル)が啓示の天使(天の御使)であるのにたいし、サタンとの闘争における神の勢力を示している。

らだ。だが汝は朽つべき背信的人間を守護者と呼んで恥じることがない。主なる神はこれについて聖なる福音書のなかで、「人の間で尊ばれる者は、神の前では忌み嫌われる」⁽³⁴⁾と述べている。ところが汝は背信的で朽つべき人間に人間的栄誉を与えたのみならず、神の栄光をも帰している！汝はギリシア人の如くに理性を失って狂暴化し、さながら悪魔のようだ。ギリシア人が己の神々を崇拜したのと同様に、汝も己の情欲の命ずるまま朽つべき背信的人間を選び出し、彼らを称えているのだ！ある者は神々の栄光のためにわれとわが身を切りきざみ、あらゆる方法で己を苦しめている。また他の者は神々に倣ってあらゆる情欲に耽っている。神の僕グレゴリオスが「見よ、彼らは醜悪を崇め、狂暴を信仰した」と述べる通りである。⁽³⁵⁾これは汝の場合にもあてはまる。彼らが汚れた神々に従っ〔て滅び〕た如く、汝もまた己の友たる裏切者らと苦難を共にし、滅ぶべきである。ギリシア人が不当にも汚れた人間を神々と呼んだ如くに、汝もまた朽つべき人間を不当にも殉教者と呼ぶ。だから汝も己の殉教者の祭日には身を切りきざみ、自ら苦しみ、踊り、楽器を手に歌うべきであろう。ギリシア人と同様に汝も行うべきなのだ。彼らが苦しんだ如くに、汝もまた己が殉教者の祭日に苦しむべきなのだ！

汝はまた次のように書いてきた。これらの「指導者はわれらの父祖が臣従していた驕れる国々を打ち砕き、汝の前に万事につけ服従せしめた」と。こう言えるのはカザン帝国に関してだけである。だがデジタルハン〔アストラハン〕の場合はちがう。汝らは戦闘に参加しなかったのみならず、〔遠征を〕考えようとしなかったのである。⁽³⁶⁾すでに触れられたかの戦場の勇気については、わたしはもう一度その愚かさを明らかにしたいと思う。一体汝はなぜそれほど傲然と奢り高ぶっているのだろうか。汝らの祖先、汝らの父や伯父らの場合はどうであっただろうか。彼らは何と賢く、勇気に満ち、思いやりがあったことだ

(34) ルカ16：15

(35) 上記(30)と同じ説教からの引用か。

(36) カザン攻略は1552年。アストラハンは1556年雷帝の軍によって抵抗なしに占領された。雷帝の側近がアストラハン征討計画に反対したかのような記述はここだけのものである。デジタルハンは、ハジ-タルハン（タタール語のアストラハン）の変形か。

ろう。汝らの勇気や知恵は彼らの夢の幻にすら及ばない。これらの勇敢で賢明なる者たちは誰に強制されたわけでもなくただ自らの意志で、戦闘の勇気と熱意をもって〔出征した〕。汝らが強制されて出征し、しかも泣き言を言ったのとは大ちがいである。だがこのような勇気ある人々も、われらが成人するまでの13年間、キリスト教徒を蛮人の手から守り通すことはできなかつたのである。⁽³⁷⁾使徒パウロの言葉を借りて言おう。「わたしも汝らのように愚かさを誇ろう。汝らが無理にそうさせたのだ。汝らは愚かにも暴力を受けいれている。誰かが汝らを食らい、顔を叩き、大威張りしても、〔汝らはじっと忍んでいる。〕わたしは腹立たしい思いでこう述べている。」⁽³⁸⁾誰でも、当時正教徒らがクリミアとカザンの蛮人に手ひどく痛めつけられたことを知っている。国土の半分が荒廃してしまつたほどである。だがやがてわれらは神の御加護をえて、蛮人に戦いを挑み始めた。われらは最初己の軍司令官セミヨン・イヴァノヴィチ・ミクリンスキー公とその同輩をカザンの地に差しむけたが、⁽³⁹⁾そのとき汝らは皆、あたかもわれらが彼を任務のためではなく、罰しようとして恥辱のうちに派遣したかの如くに言い立てたのであつた。だが軍務を不興ととりちがえるのが勇気なのであろうか。それで驕れる国々を征服することができるのだろうか。強制的にではなく自発的に出征していたとすれば、一体幾たびカザンの地へ遠征を行うことができただろうか。⁽⁴⁰⁾汝らはいつでも困難な旅に出るかのよう

(37) 雷帝はここで彼の幼少期（誕生から貴族支配の終焉時までないしは父ヴァシーリー三世歿後新たな攻勢に出る1545年までの13年間）における対カザン（及びクリミア）・タタール闘争の不首尾について想起している。この時期モスクワ国家の東・南方国境地帯はほとんど毎年タタールの侵入に悩まされていた。

(38) IIコリント12：11，11：20-21

(39) 雷帝政府による最初のカザン遠征は1545年С. И. Пункоф-ミクリンスキー，イヴァン・シェレメーチェフ，ダヴィド・パレツキーの指揮下に行われた。これは一定程度の成功を収め，カザンにおける親モスクワ派の力を強めた。（サファ・ギレイ汗の追放と翌年の親モスクワ派シャフ・アリの即位。）ミクリンスキー公が実際に雷帝の寵を矢ったかどうかは確められない。

(40) 第二の遠征（1547-1548年）は不成功に終つた。サファ・ギレイはすでに復歸していた。彼の歿（1549）後カザンでは親クリミア派のクチャク汗が実権を握る。これに対するモスクワ側の遠征（1549-1550）も失敗であつた。1551年カザン攻撃の基地となるべきスヴィヤシク要塞が築かれ，翌年新たに大規模な遠征が組織され，カザンはモスクワ軍の手に落ちた。

不承不承出かけたのだ！神がわれらに恵みを垂れ、かの蛮族をキリスト教徒の手に渡されたときも、汝らはわれらと共に彼らと戦うことを望まず、われらの下には汝らが忌避したために15000以上の者が出頭しなかったのである。⁽⁴¹⁾ 汝らはハンガリーのヤーノシュ⁽⁴²⁾の如く愚にもつかぬ言葉で民衆を惑わし、戦闘を回避させた。それでどのようにして驕れる国々を打ち破るといふのであろうか。かの地に滞在中も汝らはたえず有害な進言をなし、武器弾薬類が水中に沈むや、⁽⁴³⁾ 三日留まっただけで帰国を望んだのであった！汝らは長期の対陣中好機をじっと待つことには常に反対し、己が生命を惜しむでもなく戦いに勝とうとするのでもなく、ただただ迅速に勝利するかさもなくば敗北するかして、速やかに帰国することのみを考えていた。このように汝らが急遽帰国したために多くの有為な戦士が置き去りにされ、後にキリスト教徒の血が大量に流されることとなった。まさに町を落とそうという時にも、もしわたしが汝らを制止しなかったなら、汝らは好機も待たずに攻撃を始めて、正教徒の軍勢を徒に滅ぼすところであったのである。また神の憐れみにより町を奪取した後も、汝らは秩序の回復に努めるどころか、略奪に走ったのであった！はたして汝が愚かにも自慢する驕れる国々の征服とはこのようなものであったのだろうか。実際のところそれは一言の称賛の言葉にも値しない。なぜなら汝らは皆自発的ではなく、あたかも奴隷の如く強制されて、しかも不平を言いながら、これを行ったからだ。称賛に値するとすれば、それは自らの意志で自発的に戦った場合である。確かに汝らはこれらの国々をわれらに服従せしめた。だがそれも7年以上にわたってわが国家とこれらの国々の間に激戦が続いた後のことであつたのだ！⁽⁴⁴⁾

(41) 1552年の遠征には12～15万の兵が参加した。このときノヴゴロドの多くの勤務人階級＝軍人が出陣せずに、後にツァーリの命で封地を没収されたことが知られている。

おそらくそういう軍役忌避者が15000人もいたと雷帝は考えたのであろう。

(42) ヤーノシュ・サポヤイ。トランシルヴァニア公、ハンガリー王（在位1526－1540）。彼はハプスブルグ家からモハーチの敗戦（1526）の責任を問われ、トルコへの内通者、裏切者と非難された。

(43) カザン攻城が始まって間もない9月24－25日、嵐のためヴォルガ川が荒れ騒ぎ、ロシア側の多数の船舶が沈没した。

さてアレクセイと汝ら犬どもの支配が終るや、これらの国々は万事においてわが国家に従うようになり、今や3万人以上の戦士が正教に加勢するに至っている。⁽⁴⁵⁾ 汝らが驕れる国々を打ち破り、われらに服従せしめた次第は以上の如くである。同様に正教にたいするわれらの思案と配慮も以上に記された。汝らが悪意から考えついたところによれば、それは理性に逆らうものだというが、これについても以上の如くである。だがカザンに関してはこれまでとしよう。次にクリミアと〔南方の〕荒野について言えば、ここはかつて野獣の住処であったが、その後町が建てられ、村が設けられた。だがドニェプルやドン地方での汝らの勝利とは一体何であったのだろうか。キリスト教徒にどれだけの損失と破滅をもたらしたことだろう。しかも敵にはかすり傷一つ与えられなかったのだ！イヴァン・シェレメーチェフのことはどう言えばいいのか。正教キリスト教徒にあのような災難がふりかかったのは汝らの悪しき助言のゆえであり、われらの望むところではなかった。汝らの善意の奉公とはかくの如くであり、汝らが驕れる国々を打ち破り、服従せしめたのも、上に示した如く行われたのである。⁽⁴⁶⁾

(44) 7年以上というのは、雷帝政府のカザン遠征が始まった1545年からカザン攻略がなった1552年までをさすとも考えられるが、イヴァン自身が後述するところから考え合わせると、むしろカザン攻略後1557年頃まで続いたタタール人の反ロシア闘争のことをさしたものと考えた方がよいように思われる。この場合イヴァンは、クールプスキーらがカザン征討に熱意を示さなかっただけでなく、攻略後におけるカザン支配の早期確立を妨げたことでも非難しているということになる。(後述注(73)を参照)ところで以上の如きイヴァンのクールプスキー批判が当たっているかどうかは甚だ疑問である。とくにクールプスキーらが帰国のみを念じていたとする非難は問題である。むしろイヴァンの方がこれを望み、カザン攻略後の9日目(10月11日)には、カザン支配を確実にするために翌春までは留まるようにという側近らの懇願をふりきって、帰国の途についたのであった。

(45) 後のリヴォニア戦争においてシャフ・アリの率いるタタール部隊が重要な役割を果たしていたことが知られている。

(46) クリミア汗国との関係をめぐって雷帝とアダーシェフ、シリヴェーストルらとの間には深刻な対立があった。クールプスキーがその『歴史』において記している如く、彼ら是对クリミア積極策を主張したが、雷帝は南方国境の外交手段による安定を目ざし、対リヴォニア戦に全力を傾注しようとした。ここではアダーシェフらの南方での積極策が取るに足らぬ成果しかもたらさなかったことを指摘して、彼らの外交路線の破綻を論証しようとしている。「ドニェプルやドン地方での勝利」とは1558-1559

ドイツの町々に関し、汝はそれらがわれらの裏切者の鋭き知恵の働きにより、神からわれらに与えられたと言う。だが汝は己の父なる悪魔から何と上手に嘘をつきかつ記すことを学んだのであろう！ドイツ人との戦が始まったときのことを思い起すがよい。われらはわが家臣のツァーリ・シハレイとわが貴族の軍司令官ミハイール・ヴァシーリエヴィチ・グリンスキー公をその同輩らとともに派遣して、ドイツ人と戦わせた。われらがシリヴェーストル司祭やアレクセイや汝らから無礼千万な言葉を浴びせかけられて苦しんだのは、このときからのことであった。⁽⁴⁷⁾ その一つ一つを詳しく描くことはできないほどだ！〔考えてもみるがよい。〕われらにいかなる災難が起こったとしても、それはすべてドイツ人の仕業だったのではないか！それにもかかわらず、われらが汝らを一年の予定でドイツの町々にむけて派わしたとき——当時汝はわが世襲地プスコフに滞在していたが、それもわれらが送りこんだわけではなく、汝自身の都合でのことであった——われらはわが貴族にして軍司令官のピョートル・イヴァノヴィチ・シューイスキー公と汝にたいし、七度以上も使者を差しむけた。だが汝らはわずかな手勢を率いて出撃しただけで、われらが使者を通じて何度も催促してはじめて、15を越える町々を奪取したのであった。⁽⁴⁸⁾ はたして己の知

年のザポロジェ・コサックのアタマンⅡ・ヴィシネヴェツキーやダニール・アダーシェフ（アレクセイの兄弟）らの遠征をさしている。また1555年にはⅡ. B. シュレメーチェフが南方へ派遣され、クリミア軍と戦ったが敗れ、彼自身も負傷している。このような事情から（またクリミアの背後に控えるトルコとの衝突を回避したいという配慮もあって）、イヴァンはやがてクリミアと和を結び、リヴォニア戦に全力をあげて取組むことになる。

(47) リヴォニア戦争は1558年1月前カザン汗シャフ・アリと M.B. グリンスキー麾下のロシア軍のリヴォニア侵入によって始まった。本文中のシハレイはシャフ・アリのこと。タタールの汗をツァーリとするのは中世ロシア語の通常の用法である。同年5月には A. バスマーノフの指揮するロシア軍はナルヴァを占領した。おそらくすでにこの頃には戦争の続行と戦線の拡大をめぐる雷帝と「選抜会議」の有力メンバーとの間に意見の対立が生じていたと思われる。これを雷帝はシリヴェーストルらからの「無礼千万な言葉」と表現している。彼は以下にドイツ人（リヴォニア騎士団）こそが戦うべき主要な敵であることを論証しようとしている。

(48) 1558年6月Ⅱ.Ⅱ. シューイスキーとクールプスキー、ダニール・アダーシェフらの軍はプスコフを発してリヴォニアに入り、ノイシュロス（シレンスク）、ドルパート（ユーリエフ）など（年代記によれば「20の町々」）を占領した。

恵によるのではなく、われらの使者に促されてはじめて町々を奪取するのが、鋭き知恵の働きなのであろうか。わたしは当時シリヴェーストル司祭とアレクセイ・アダーシェフまた汝ら全員が、ドイツの町々をめぐる戦争を行うべきではないと首尾一貫して反対したことをよく覚えている。その結果デンマーク王の狡猾な提案により、リヴォニア人に戦争準備のために丸一年もの余裕を与えてしまったのである！彼らは冬になる前に攻撃をしかけてきた。⁽⁴⁹⁾かくてどれだけのキリスト教徒の民が殺害されたことであろう！かくの如くキリスト教徒の民を滅ぼすことが、汝らわが裏切者の働きまた善行なのだ！その後われらは汝らを汝らの頭目アレクセイと多数の兵とともに進発させたが、汝らは辛うじてヴェリヤン〔フェリン〕を奪ったのみで、むしろわが民を多数死に至らしめたのであった。そのとき汝らはリトワ軍を御化けに驚く子供よろしく恐れ^{おの}戦いたのであった！汝らはわれらの命令でパイドゥ方面へも渋々前進した。だが戦士らを苦境に立たせただけで、結局は何も得られなかったのではなかったか！⁽⁵⁰⁾はたしてこれが知恵の働きであらうか。汝らはこのようにしてドイツの堅固なる町々を確保しようと努めたのであろうか。もし汝らの悪質な妨害がなかったら、神の御加護によりすでに全ゲルマニアが正教世界のものとなっていたことであろう。だが汝らはこのときからリトワとゴートおよび他の多く

(49) 初戦の大勝利にもかかわらず1559年に入るとロシア軍の作戦は中止してしまう。同年3月リヴォニア側の要請により、デンマーク王クリスチャン三世が介入し、その結果6ヶ月間の休戦(1559年5月-11月)が締結された。デンマーク王の親書(「嘆願状」)はアレクセイ・アダーシェフによってツァーリに取り次がれたという。この休戦がダニール・アダーシェフのクリミア遠征と時を同じくしていたことを考えると、南方での積極路線を主張するアダーシェフ派がデンマーク王の「狡猾な提案」に乗ったとする雷帝の非難もあながち根拠のないものではない。(ロシア軍は事実上「丸一年」積極的な軍事行動から遠ざかることになった。)リヴォニア側はこの休戦を最大限に活用して態勢の立て直しに努めた。彼らはまずその名目的な保護者である神聖ローマ皇帝フェルディナンドの介入を求め、皇帝は1560年初頭リヴォニアの件でモスクワに使者を派遣している。1559年8-9月には新騎士団長ケトラーが南および中央リヴォニアにたいするポーランド王ジグムント・アウグストの主権を認めて、その対ロシア戦への参戦を求めた。(これ以来戦争は国際化し、ロシア側にとって由々しき事態になる。)このような準備をした上でリヴォニア軍は1559年10-11月休戦条約が切れる前に反撃に出てくる。この条約違反の知らせを得て雷帝一家はモジャイスクからモスクワへ急遽戻ることになったのであった。(前記注(20)を参照)

の民を正教徒に立ち向わせた。これが汝らの鋭き知恵の働きなのであろうか。⁽⁵¹⁾ 汝らはこのような方法で正教を強めようとしたのであろうか。

われらは汝らを一族諸共滅ぼそうとは思っていない。だが裏切者はどこであろうと処罰され、不興を蒙る。汝がここから走り去った当の国においても、これについては十分に見聞きしていることであろう。すでにわたしが述べた如き汝らの奉公ぶりから判断するならば、汝らが幾度罰をうけ、不興を蒙ったとしても、不思議ではなかつただろう。だがわれらが汝らに下した怒りは穏やかなものであった。もし汝の行為にふさわしく処罰したのであれば、汝はわれらの下から敵国へ去ることもなかつたであろう。すなわち、もしわれらが汝に信頼をおかなかつたなら、汝をかくも遠方のわが町⁽⁵²⁾に派遣することもなかつただろうし、汝が逃亡することもできなかつたであろう。だがわれらは汝を信じ、わが世襲地に派遣した。そして汝は犬の如く裏切を実行したのであった。

わたしはこの身が死ぬことがないとは思っていない。なぜなら死はアダムの罪〔の結果〕全人類が共通に負わなければならない負債だからだ。わたしは緋袍を纏う身ではあるが、その本性上すべての人間と同様あらゆる面で弱き存在であることを知っている。汝はさかしらにもわたしが人間の本性を越えているかのように考え、またそう要求しているが、それはまったくの邪説である。すでに記した如く、わたしは神の恩寵により信仰を、たとえ不完全であるにせよ、精一杯強めることを学んだ。このことでわたしは神に感謝している。もし人が

(50) 1560年2月雷帝はクールプスキーとダニール・アダーシェフを再度リヴォニアへ向わせる。5月にはさらに И. Ф. Мусхиславский, М. Я. Морозов, Алексей・アダーシェフらの大部隊が進発する。8月にはロシア軍はエルメス近郊の戦いに大勝をおさめ、ヴィリヤン（フェリン）を占領した。（その結果リヴォニア騎士団は解体に追いこまれる。）だが同年末ロシア軍はパイダ（ヴァイセンシュタイン）攻略に失敗する。1561年末リトワ軍が反撃し、ロシアからタルヴァス（タルヴァスト）を奪回する。このときリトワ軍が抗道を掘って奇襲をしかけたことを、雷帝は「御化けに驚く子供よろしく……」と表現したのかもしれない。

(51) 同じ頃スウェーデン人（雷帝の言う「ゴート人」）も戦争に介入し、コルィヴァン（レヴァル、タリン）とパイダを占領した。雷帝はスウェーデンの介入をもクールプスキーらの責任と考えている。

(52) ユーリエフ（ドルパート）のこと。クールプスキーはここから1564年4月30日リヴォニアへ逐電した。

畜生の如くであったなら、それは笑うべきことであろう。もしそうなら、人は息をしても、彼に魂はないことになる。これこそサドカイびとの異端である！⁽⁵³⁾ 汝が理性を失って猛り狂いながら書きつけるのはこのようなことだ！これにたいしわたしは主の最後の審判を信じている。そのときには人の靈魂が、一体となって行動する肉体とともに呼び出され、各々その行為に応じて、ツァーリももっとも卑しい者も区別されることなく、皆一つになって裁きをうけるであろう。すなわち両者ともさながら兄弟の如くに等しく問い質され、誰もがその行為にふさわしく裁かれるのである。汝はあたかもわたしが厳正なる裁きの場に出ることを望まぬかのように書いた。だが汝は他人に異端の罪を着せながら、自らはマニ教徒よろしく悪魔の邪説を記している！⁽⁵⁴⁾ 彼らが空しく主張するところによれば、天を統べるのはキリストであるが、地上においては人間自らが主人であり、黄泉を支配するのは悪魔であるという。汝も同様に未来の裁きを説きながら、人の罪ゆえに下される地上における神の罰を軽んじている。だがわたしは理解しかつ告白する。悪しき生活を送り、神の戒律を守らぬ者は、かの世において苦しみをうけるのみならず、この世においても己の悪行に応じて神の正しき怒りと主の憤りの杯を飲みほし、様々な罰に苦しまなければならない。またこの世に別れを告げた後は、主の正しき裁きを観念しつつこの上なく厳しい判決をうけ、判決後も終ることなき永遠の苦しみにあうことになるだろう。かくの如くわたしは主の最後の審判を信じている。さらにわたしは知っている。キリストは天と地と黄泉を、また生者と死者を支配しており、天と地と黄泉にあるすべてのものは彼の望みと父の導き、また聖靈の祝福によって立っているのである。もしそうでなければ、これらの者たちは苦しみをうけるのである。汝は、わたしが己の罪の弁明のために、隠しごとも秘密もすべて見通されるわが神キリストの前に立つことを、望まぬかの如くに記している。だ

(53) サドカイびとはユダヤ人の指導的階級の一。現実的、合理的、世俗的な志向が強く、死後の世界や復活、審判、靈の存在を否定した。

(54) 3世紀ペルシアのマニがゾロアスター教をもとに説いた折衷的宗教。教義の中心は善と悪、光と闇の対立が永遠に続くとする二元的思想。雷帝は、クールプスキーが最後の審判のことを説くのみで、現世における応報を忘却している点でマニ教徒のようだと考えているようである。

がそれは誤りだ。汝はマニ教徒のように主の厳正なる裁きについて戯言^{たわごと}を言っているのだ。わたしは意識したにせよしなかったにせよ、自分が犯したすべての罪過について奴隷と同様に裁きをうけなければならないものと信じている。それもわが罪のみならずわが臣民の犯した罪についても、わが不注意によるものである限り、わたしが責任をとらなければならないのだ。汝の理性は何とも笑うべきものではないか。もし死すべき君主ですら〔その臣民を〕幾度も、無理矢理に裁きの場に引き立てるのであれば、万物を統べるツァーリのなかのツァーリ、主のなかの主にたいし服従しないという法があるだろうか。たとえ愚か者が服従を望まなかったとしても、一体神の怒りから逃れてどこに隠れようというのか。神の知恵は無限の天空をとらえ、底無しの深淵の水を抑え、海を静められる。すべて生命ある者の息は彼の手中にあるのである。⁽⁵⁵⁾ 預言者が語るとおりだ。「わたしが天に登っても汝はそこにおられ、黄泉に下ってもおられる。わたしが暁にわが翼を駆って海の果てに住んでも、汝の御手はそこでわたしを導き、汝の右の御手はわたしを支えられる。汝が密かに創られたわが骨と、地の深い所で合わされたわが肉は、汝から隠れることがない。」⁽⁵⁶⁾ このようにわたしは主の厳正なる裁きを信じている。一体生者も死者も神の全能の右手からどこに隠れようというのだろうか。神の前には万事が露わに開かれているのである。

わたしはわが真の神なるキリストが驕れる迫害者の敵であることを知っている。聖書にも「主は高ぶる者を斥け、へりくだる者に恵みを賜う」と書かれている。⁽⁵⁷⁾ 誰が高ぶる者か考えてみようではないか。わたしか、それとも汝か。わたしは神がわたしに下僕として服従させた汝らに、わが意志を行うよう命じているだけである。これにたいし汝らは神の御旨に基づくわが支配権と己が下僕の軛とを否定し、あたかも主人であるかの如くに己の意志をわたしに押しつけ、教え、批判し、己を教師の地位に押しあげているのだ。神の僕グレゴリオ

(55) ここはヨブ記26：5－8，12：10などを想起させる。

(56) 詩篇139：8－10，15

(57) ヤコブ4：6，Iペテロ5：5

すが、若さを恃んでいつも教師であろうとする不遜な者らにたいし次のように語っている。「汝は鬚も生えないうちから老人を教えようとしている。それとも汝は^{よわい}齡を積み重ね、徳が増し加わって人に尊ばれることなしに、教えることができる^{よわい}と信じているのだろうか。またここでダニエルとその同類を思い浮かべるであろうか。彼は若き裁き人、その舌は寓話を語る。人を侮辱する者は皆言いわけを考えているからだ。だが〔いずれにせよ彼は例外である。〕不完全なものが教会の法をつくることはない。それは一羽のつばめが春をもたらすことがなく、一つの形が幾何学者をつくるのでもなく、一艘の船が海を表わすのでもないのと同様である。』⁽⁵⁸⁾ 汝も同様に誰に承認されたわけでもないのに、教師の位を不当にも己がものとしている。はたして主人が下僕に教えるのが驕れることなのか。それとも下僕が主人に命令することがか。いかに無知な者でも判断できるであろう。犬よ、汝は三人の総主教と多数の僧正らが教会会議に参集し、不信仰なテオフィロス皇帝にたいし長大な書状を送ったことを思い起こさないであろうか。⁽⁵⁹⁾ だが彼らはテオフィロス皇帝がいかに不信仰であっても、汝が書いたほどの誹謗の言葉は書かなかったのだ。そうであるなら、信仰篤き皇帝には一層へりくだって書くべきである。そうすれば汝自身が神の憐れみをうけるであろう。わたしはわが神キリストを信じている。だから彼ほどの罪は心のどこにも抱いていない。もし権威ある僧正がたですら不信仰な皇帝を誹謗しなかったとすれば、〔教師の〕位を詐称し、猛り狂って誹謗する汝は一体何者なのか。汝は神の法を力づくで打ち立てようとしている。そして己が悪魔の欲望をもって使徒の全伝承を踏みにじっている。だが使徒ペテロはこう言っている。「権力者の如く民にむかうのではなく、むしろ群の模範となるべきである。強制されてではなく自ら進んで行き、恥ずべき利益のために行ってはならない。』⁽⁶⁰⁾ この教えを汝らは完全に無視している。

汝らはまたわたしが人々を迫害したと言う。だが司祭やアレクセイとともに

(58) 再びナツィアンのグレゴリオスの説教からの引用。

(59) テオフィロスはビザンツ皇帝（在位829—42）。聖像破壊皇帝。三人の総主教らが皇帝に宛てて書いた書状はロシアにおいても古くから知られていたという。

(60) I ペテロ 5 : 3, 2

迫害したのは汝らではなかったか。はたして汝らはコロームナ市民にわが助言者たるコロームナ主教フェオドーシーを石で打ち殺すよう命じなかったであろうか。そして神が彼を守られると、今度は汝らは彼を主教座から追放してしまった。⁽⁶¹⁾ わが^{カズナチエイ}財務長官ミキータ・アフナーシエヴィチの場合はどうであっただろう。何ゆえ汝らは彼の財産を理由なく強奪し、彼を何年間も僻遠の地に飢えと寒さのなかに監禁したのか。⁽⁶²⁾ 誰が汝らの迫害を完全に数えあげることができるだろう。俗人、聖職者を問わず、苦しんだ者はあまりにも多すぎるのだ！われらに少しでも恭順の意を表した者は皆、汝らによって迫害された。それとも汝らが悪魔の罠みにならって罟を結び張りめぐらしたことが正義なのであるうか。汝らの無法はさらに一層深刻となっている。というのも汝らはパリサイ人の如く尊大になっているからだ。彼らは外見は義人でありながら、内にあっては偽善と無法に満ちている。⁽⁶³⁾ 同様に汝らも、人前では悪を懲らすためと称して力をふるうが、実際には己の憤怒の不当な欲望を実現しようとしているのだ。汝らのこのような迫害は万人の知るところである。だが〔最後の審判における〕尋問は単に髪の毛に及ぶだけでなく⁽⁶⁴⁾、預言者が次のように述べる如く、心の動きにまで及ぶのである。「汝の目は、まだできあがっていないうちにわが身体を見られた。汝の書物には万事が書きこまれるのである。」⁽⁶⁵⁾ だが裁こうとしたのは汝だけではなかった。聖僧伝にヨアン・コロフに関する記事がある。⁽⁶⁶⁾ 彼は兄弟を裁いたが、この兄弟たるや大僧院に住みながら、飲酒と淫乱その他の放縦にふけり、そのまま死んだような男であった。彼は兄弟のことを

(61) フェオドーシー。1542年からコロームナ主教。

(62) ニキータ(ミキータ)・A. フーニコフ-クールツェフはモスクワ国家の重要な文官。まず書記、印璽官ついで財務長官となった。彼は1553年の「陰謀」の際には最も遅れて宣誓をした人物の一人であったが、1570年まではその地位を維持した。70年ノヴゴロドの「陰謀」との関連で処刑された。雷帝が上に記すような事件については不詳。

(63) マタイ23：28

(64) 本稿（Ⅰ）-117頁及び注(6)参照。

(65) 詩篇139：16

(66) 以下の記事はヨアンネス・コロボス（5世紀のコプト人隠者）とは関係がなく、ヨアンネス・シレントリウス（5-6世紀アルメニアの主教）に関わるものである。

（Переписка, 400; Fennell, 130 - 131）

思って深いため息をついた。そのとき彼は夢を見た。彼は〔天に〕引き上げられ、大きな都の前に連れてこれられた。彼はわれらの主イエス・キリストが玉座に座し、周囲に多くの天使の群が立っているのを見た。彼の前に死んだ兄弟の霊が連れてこられ、天使たちが彼の判決を求めてこう尋ねた。彼はこの霊に何処に住むように言い渡すか、と。だが彼は答えられなかった。彼と彼を導く者らが門の前に近づくと、中に入るのを禁ずるイエスの声がした。イエスの声は遠くから次のように言った。「わが裁きを己がものとしたこの者はアンチキリストではないか。」その声のあと彼は追い出され、門は閉じられ、僧服も剥ぎとられてしまったが、この僧服は神の庇護を表わすものなのである。そのとき彼は夢から醒めたが、僧服はなくなっていた。このようにして彼はそれが正夢であることを知ったのである。その後彼は15年の間荒野において苦行し、人間はおろか野獣の姿すら見る事がなかった。このように苦しんだ末はじめて彼は〔再び〕夢を見る事が叶えられ、僧服と赦免とを受けたのである。この哀れな男を見るがよい！彼は裁いたわけではなく、単にため息をついただけである。だがどれだけ苦しんだことだろう。義人であってすらこうなのである！幾度も不義を行い、神の裁きを己がものとなし、憐れみの情をもって他人のことを悲しむのではなく、居丈高になって威嚇し断罪する者たちが一層ひどく苦しむのは、確かなことなのだ。嘆き悲しむだけでこうも苦しむのなら、裁く者がさらに苦しむのは当然のことであろう！

汝はわたしと汝の間の裁き手としてわれらが神キリストを立てようと言う。わたしも彼の裁きを忌避するものではない。実際この方はわれらの主なる神イエス・キリストであり、正しき裁き手、心と胸のうちを見通される方である。⁽⁶⁷⁾ その前では誰が何を考えようと、一瞬のうちにすべてが露わになり、明らかとなる。その目の前に隠れるものは何もなく、彼はすべての秘密と奥義を知っておられる。彼はまた汝が何ゆえにわたしに反抗し、わたしを憎み、初めのうちわたしに罰せられたのかをも知っておられる。もっとも後にわたしは汝のあまりの愚かさゆえに、この処罰を穩便に止めておいたのだが。それにもかかわら

(67) エレミヤ11：20

ず汝らは万人の躓きの^{もと}根源である。というのも汝らは預言者が述べる如く、わたしを人間ではなく虫けらとみなし、門の傍に座しながらわたしのことを批評し、仲間と酒を飲み、歌いながらわたしを嘲っているからである。⁽⁶⁸⁾ 汝のこのような狡猾な企みと^{はかりごと}謀略のすべてにたいしては、われらの神キリストが真実の裁き主である。汝もキリストを裁き主として立てている。だが汝は彼のなせる業は拒絶している。キリストは「憤ったままで、日が暮れるようであってはならない」⁽⁶⁹⁾とされているのではないか。それなのに汝は赦すこともなく裁きの場に行かんと欲し、災を及ぼす者らのために祈ることを拒んでいる。

汝はわたしから不当な災難も迫害も蒙りはしなかったのだ。われらは汝に不幸も災厄も与えはしなかった。たとえ小さな罰が下されたとしても、それは汝の罪過のゆえであった。汝がわれらの裏切者と気脈を通じたからである。汝が行いもしなかった偽証や裏切をわれらが責めたことはなかった。ただ汝が実際に過ちを犯した場合には、われらは後で罪の程度に応じて汝を罰したのである。汝はわれらの怒りをかけた者の数が多すぎて、数えあげることができないと言う。だが汝らが己の悪魔の策略をもってわたしにたいして行った公私にわたる裏切と迫害はどうであろうか。それは世界中の人びとも書き尽せないのではなからうか。われらは汝から全財産を奪ったことはなかったし、汝を神の地から追放したこともなかった。むしろ汝自身が勝手に放棄し、宦官エウトロピオスの如く、⁽⁷⁰⁾ 教会に反抗したのである。というのも教会が彼を裏切ったのではなく、彼自身が教会を拒絶したからである。汝もこれと同様であった。すなわち神の地が汝を追い出したのではなく、汝自身が神の地を拒み、その滅びを願って立ちあがったのである。わたしが汝にどのように邪悪で執念深い憎悪を示したというのだろうか。われらは汝を若年の頃からいたる所で、わが宮廷においても^{シクリト}会議の場でも見てきた。汝は今回の裏切以前にもわれらを滅ぼさんと懸

(68) 詩篇22：6，69：12

(69) エペソ4：26

(70) ビザンツ皇帝アルカディウス（在位383-408）の寵臣。彼は皇妃エウドクシア（エウドキア）の怒りをかい、教会に庇護を求めたが、彼が頼った聖ヨアンネス・クリュソストモスはこれを受けいれず、ためにエウトロピオスは捕えられ処刑された。以前彼が教会による庇護権の行使に反対したからであるとされる。

命になっていたが、われらは汝の悪企みにふさわしい苦難を与えたわけではなかった。はたして汝がわれらの生命に関し悪事を企んでいることを知りながらなお、汝をわが側近くおき、汝の父以上の名誉と財産を与えたことが邪悪で執念深い憎悪になるのであろうか。汝の両親がいかなる名誉と富とを得ていたか、汝の父ミハイール公がいかなる恩寵と富と名誉のうちにあったかは誰もが知っている。また汝が父と比べてどうであるか、父の下には何人の領地管理人がおり、汝の下では何人だったかについても皆が知っている。汝の父はミハイール・クベンスキー公の^{ボヤーリン}貴族であった。というのも彼はクベンスキー公の伯父だったからである。⁽⁷¹⁾これにたいし汝はわれらの貴族であった。⁽⁷²⁾われらがこれらの名誉を汝に与えたのである。はたして名誉と財産と報酬が十分でなかったというのであろうか。だがわが恩寵のゆえに汝は万事において父親以上に恵まれていたのだ。ところが勇氣においては汝は父親に劣り、あまつさえ裏切を働いたのであった。そうでありながら不満だということがあるだろうか。われらにたいし絶えずどこまでも罣を仕掛け、障害物をおき、ユダのようにわれらの滅びをはかることが、汝の善意であり愛なのであろうか。

また汝が愚かにも言い立てるところによれば、われらのために異邦人の手で流された汝の血は神にむかってわれらのことを告発しているという。だがその血はわれらの手で流されたものではない。それゆえこの主張は滑稽であろう。他人の手で流された血なら、他人のことを告発するがよかろう。そのうえ汝は

(71) クールプスキーの父ミハイールについて詳しいことは分らない。彼がM. II. クベンスキー公に仕える貴族であったという雷帝の記述は、彼独特の誇張と考えるべきであろう。むしろクールプスキーとクベンスキーは門地制的には同等であったことが知られている。両者はともにヤロスラフスキー諸公の末裔である。なお雷帝は先にもクールプスキー一族を非難する言葉を書いていた(本稿(I)-147頁)が、そこでの扱いに比し、ここでのミハイール・クールプスキー公の扱いが好意的であるとする見方がある(Fennell. 135, note 7)。Keenan (Apocrypha, 82-83)はこの「矛盾」を根拠の一つにして、雷帝第一書簡のオリジナル版の決定に関しある重大な結論を出している。だがこれを「矛盾」ととらえる必要はないように思える。雷帝は父ミハイールも裏切者と考えており、ただ子アンドレイの悪事はそれに優ることを力説しているのである。

(72) アンドレイ・クールプスキーは1556年雷帝により貴族とされている。

祖国に責務を果たしたのであろう。〔ならば一層それはわれらの責任ではあるまい。〕もし汝が責務を果たさなかったのであれば、汝はキリスト教徒ではなく、蛮人である。その場合汝の非難はまったくお門違いとなる。むしろ汝らゆえに流されたわれらの血の方が、いかに神にむかって汝らを告発していることであろう。負傷による血ではない。迸る血潮でもない。わたしが汝らからうけた幾多の労苦といわれなき苦難のゆえに流した滴りおちる汗〔が告発するのだ。〕われらは汝らによりどれほど力にあまる重荷を負わされたことであろう！汝らの度重なる悪意と侮辱と抑圧のゆえに、われらは血の代りに溢れる涙をながし、深きため息をついた。わが心の呻きは重く、わたしがうけた辱しめは大きかった。というのも汝らは結局のところわたしを愛さなかったし、わたしとともにわが皇妃と子供たちを悼むこともなかったからである。これら一切が、汝らが愚かにも主張した以上に、汝のことをわが神に告発しているのである。正教のために己が血を流したというのと、名誉と富のために〔流した〕というのとでは意味がちがうからである。もちろん後者は神の嘉し給うことではない。栄誉のための死よりはむしろ縊死の方が良しとされるであろう。わたしがうけた抑圧、すなわち流される血に代わってわたしが汝ら自身から蒙ったあらゆる悲哀と痛憤は、汝らの頑な生活が播いた悪質な侮辱の種ゆえに止むことがない。それこそが神にむかい汝らを大声で永遠に告発し続けるであろう！汝は誠実にではなく偽りの気持をもって己が良心に問うたのだ。それゆえ汝は真理を得られなかった。ただひたすら軍功のみを問い、汝がわれらに働いた非礼にはまったく注意を払わなかったからである。それゆえにこそ汝は己を罪なき存在と考えたのであった。

「輝かしい勝利と華々しい征服」を汝はいつなしとげたのであろうか。かつてわれらはわが威令に従わぬ者らを服従せしめんとして、汝をわが世襲領のカザンに派遣したことがある。だがそのとき汝は罪人どもの代りに無実の者らをわれらの許に連れ来たり、この者らを裏切者に仕立てあげた。われらが汝を派わして捕えようとした者たちは何事もなく放置されたのである。⁽⁷³⁾ またわれらの敵、クリミアのツァーリがわが世襲領トゥーラに来襲したときも、われらは

汝らを派遣した。するとクリミアのツァーリは恐れをなして退却し、軍司令官アク・マホメト・ウランらの小部隊が残されただけであった。だが汝らはわが軍司令官グリゴリー・チョムキン公の許へ宴会に出かけ、その後初めて追討にかかった。かくして敵は何事もなく逃れ去ったのである。⁽⁷⁴⁾ 汝らは何度も負傷したかもしれない。だが栄えある勝利を博したことなど一度もなかったのだ。一体わがネヴェリの町の近郊では何が起こったのであったか。汝らは15000の兵を擁しながら、4000の敵を破ることができなかったのではなかったか。ただ勝〔てなか〕ただけではない。それどころか汝ら自身が傷を負い、辛うじて帰還し、何も得るところがなかったのである。⁽⁷⁵⁾ これが輝かしい勝利、華々しくまた称賛に値する名誉ある征服なのであろうか。確かに勝利したこともある。だがそれは汝らの指揮によるものではなかった。それゆえ汝らの誉とはならな

(73) ここでイヴァンは、クールプスキーらが征討後のカザンにおいて行ったいわば占領地行政の巧拙を問題にしている。1553年秋クールプスキーはС. И. Пунков-МиклинскийやИ. В. Шелемев-Чевらとともにタタール人の反乱鎮圧のためにカザンに派遣された。『歴史』におけるクールプスキー自身のまた他の記述から明らかな如く、この鎮圧軍は所期の目的を達し、反乱は残酷に鎮圧された。だがクールプスキーらの行動は雷帝を満足させなかったようである。雷帝はカザンの「イスラム軍」をロシア軍の一部として最大限に活用せんと欲していた。現に1558年リヴォニアに侵入したロシア軍のなかにシャフ・アリの率いるタタール人部隊が加わっていたことについてはすでにふれたとおりである。クールプスキーらがおそらくは宗教的情熱に駆られて行った過度の懲罰行為は雷帝のこうした思惑を台無しにする恐れがあった。

(74) 1552年ロシア軍がカザンへ遠征を開始した頃、南方トゥーラ方面へクリミア汗デヴレト・ギレイの軍が押し寄せた。明らかにカザン遠征軍を牽制しようとしてのことであった。このときトゥーラ軍司令官チョムキン公の部隊は雷帝の遠征軍に加わるべく出立したところであった。彼が戻ったとき、すでにクリミア軍は撤退していた。他方雷帝はクリミア軍来襲の知らせをうけて直ちにカシーラからП. М. Шиченяр-Чев公とクールプスキー軍を、ロスチスラヴリからИ. И. Пронский公らの軍を向わしめた。クールプスキーの『歴史』によれば、彼らは退却中のクリミア軍を追ひ、おそらくはその後衛部隊に大打撃を与えた。クールプスキー自身頭と身体中に負傷した。チョムキン公との宴会については他に記述はない。

(75) ネヴェリの戦いは1562年8月。これについてはイヴァン以外にはポーランドの年代記(マルチン・ビエルスキ)が伝えるだけである。それによれば、1500のポーランド兵がクールプスキー麾下の4万のロシア軍を破ったという。両者の記す数字が違っている(いわば逆転している)ことが注目される。ビエルスキはほかならぬこの敗戦がクールプスキーの亡命の原因と考えている。もっともこの説には批判が多い(スクルインニコフ、キーナンら)のも事実であるが。

いのだ！

また汝は、生みの親を見る機会が少なく、妻を知ることもなく、故郷から遠く離れ、わが最果ての町にあって常にわが敵と戦い、病苦を耐え忍ばねばならなかった、と言う。数々の戦闘において蛮人により負傷させられ、全身これ傷だらけだと言う。だがこれらはすべて汝らが司祭とアレクセイと一緒にあって権勢をふるっていたときのことである。それが不快であるというなら、何ゆえ汝はそうしたのだろうか。もし汝が行ったのなら、自ら思う通りに行っているが、何ゆえわれらに責任を押しつけようとするのだろうか。逆にもしわれらがそう行わしめたとしても、何も驚くことはない。というのもわれらの命令に従うのも汝らの務のうちであるからだ。もし汝が雄々しき戦士であるなら、戦場での労苦を数えたてたりせずに、新たな艱難を求めて勇み立つことだろう。だが戦場での労苦を列挙しているところからみると、汝はどうやら逃亡者であるようだ。汝は戦場での労苦を忍ぶことを欲せず、安逸を求めた。もっともわれらは汝のこのようにとるに足らぬ軍務でも、まったく無意味なものと考えているわけではない。われらは汝の悪名高い裏切もわれらにたいする妨害も気に留めずにおいた。それゆえ汝は栄光と名誉と富とを与えられ、われらの最も忠良なる臣民の一人とされたのである。もしそうでなかったら、汝は己が悪行にふさわしく厳罰に処されたことであろう。もしわれらの憐憫が汝の上になかったなら、汝はわが敵の下へ逃亡することもできなかつたであろう。もしわが迫害が、汝が悪魔の理性によって記したほどに激しかったとしたならばのことである。汝の戦場における振舞については、われらはすべて存知ておる。汝らの頭目であるシリヴェーストル司祭とアレクセイ・アダーシェフが身の分際も弁えずに語った如く、わたしのことを愚鈍で幼児並みの理解力しか持ち合わせていないと考えてはならない。また以前汝らがシリヴェーストル司祭とアレクセイとともに狡猾な助言をもってわたしを惑わそうとしたように、わたしを子供だましの御化けで嚇かすことができると思っではならない。こうしたことが今でもできるとは考えるべきでない。「掴まえることのできぬものを手に入れようとしてはならない」と格言に言われているとおりである。⁽⁷⁶⁾

汝は〔万事に〕報われる神に救いを求めている。確かに神は善きにつけ悪きにつけ万事に報われる。だが人ははたして誰が、いかにして、また己のいかなる行為にたいし報いをうけるのか、よく考えてみななければならない。ところで汝は己の顔を高貴だと思っているらしい。だがそのようなエチオピア人の如き顔を一体誰が見たいと思うだろうか。誰がどこで空色の眼をした義人を見かけるだろう。というのも汝の顔は狡猾な精神を表現しているからだ！⁽⁷⁷⁾

汝はまた沈黙を望まず、われらのことを始めなき永遠の三位一体の神といとも浄き主なる聖母、またすべての聖人がたに絶えず訴え続けるだろうと言う。だが呪われた者よ、汝の祈りがたとえ正当なものであったとしても、神の僕ディオニシオスが、その書簡において主教ポリカルプに關しどう記しているのかを想い起してみるがよい。彼はこう書いている。「もし汝が神の姿を〔見たいと〕望むのであれば、われらはある聖人のことを想い起そう。だが笑わないでほしい。本当のことを話そうと思っているのだから。あるときわたしが〔巡礼として〕クレタにあったとき、聖なるカルプがわたしを受けいれてくれた。彼はその浄らかな知恵のゆえに、他の誰よりも神の幻〔を見る〕にふさわしい人物であった。というのも彼は、心を浄める備えの祈りの最中に至福の聖なる幻が現われるまでは、決して秘跡も礼拝も始めないほどであったからである。さて彼〔カルプ〕は次のように語った。あるとき異教徒の一人が彼をいたく悲しませた。それはこの男が〔異教の祭日を〕浮かれ騒いで祝いながら、ある信仰者を教会から引き離し、不信仰へと誘惑したからである。二人のために熱心に祈り、神と救い主の御加護を求めてやるべきであった。信仰者を〔教会に〕連れ戻し、

(76) 出典不明。巷間に流布した諺の類か。

(77) クールプスキーの顔が「エチオピア人」のようだ（顔が黒ずんでいた？）というのは、単なる悪口ではなく、ある程度事実を伝えているものと考えられる。雷帝はこれを（中世人に特有の思考に従って）内面の汚れを表わすものと見ている。「空色の」
зкры 眼をした者に義人はいないという思想は、8-9世紀アラビアの文献で、ヘブライ語版から15世紀末-16世紀初頭にロシア語に訳された『奥儀書』 Тайная Тайных （または『アリストテレスの門』）のうちに見える。そのなかでアリストテレスは弟子のアレクサンドル（大王）に「空色の眼をした助言者」を警戒するよう教えているのである。おそらく雷帝は、当時のロシアでは非公認の文献ではあったが、帝王学のテキストとしては最高のこの作品を知っていたと考えられる。

不信仰者が自ら時至る前に苦しむことのないようにである。〔だが彼はそうしなかった。〕わたしは彼がこのときどうしてそれほどに憤慨し、悲嘆にくれたのか分らない。いずれにせよ彼は悪意を抱いたまま眠ってしまった。（もう夜であった。）真夜中に彼は起きた。（いつもこの時分に彼は聖歌を歌うために目覚める習慣になっていたのである。）眠りが浅く、たえず妨げられて十分に休むことができなかつたからである。彼は起きあがって神に祈り出したが、悲嘆のあまり信仰を忘れて次のように言った。『神を知らぬ者どもが主の正しき道をねじ曲げながら、なお生き続けるのは正しくない。』こう言うと彼は二人を火にて焼き、その生命を容赦なく奪うよう神に祈り求めた。すると彼は栄光〔の神〕を見たという。そして突然彼のいた家が揺れ出し、まず上の方から真二つに裂け、前方に何か甚だ明るく光る火が現われた。それは天の国から（彼はどこか屋外にいるように思えたのであった）地上へと運ばれてきた。それから天が口を開け、その奥に彼はイエスの巨大な姿とその前に居並ぶ天使たちを見た。カルプが驚愕の念をもって天上に見たのはこのようなものであった。他方彼が身を屈め〔足下に目をや〕ると、地中に深い大きな裂け目が暗く口を開けているのが見えたという。彼が呪った二人の者が彼の眼前でこの裂け目の淵に震えながら、哀れな姿で立っていた。彼らはふらつく足で何とか踏み止まっていた。深淵の奥底から何匹もの蛇がはい登ってきて、彼らの足の周りを這いずりまわっていた。絡みついたり、束になって押し寄せたり、纏いついたり、引っぱったり、あるいは噛み、尾で打ち、唆し、絶えず裂け目に引きずり込もうと奸策をめぐらすのであった。蛇に混じって何人かの男がいた。彼らは二人に一斉に飛びかかり、揺すり、押し、そして打った。見たところ二人は、意志に反してかそれとも望みどおりにか、徐々に悪に捕えられ、屈服し、もう裂け目に落ちんばかりであった。カルプがさらに続けるところによると、彼は下を見ながら一人嬉しくなり、天上のことはすっかり忘れていた。だが彼らがいつまでも落ちて行かないので、彼は忌々しくなり、疲れ果ててしまった。実際彼は何度も彼らに〔落ちるよう〕要求し、侮辱し、呪って、疲労困憊してしまつたのである。彼がやっとの思いで立ちあがり、再び天を見あげると、以前と同様にイエ

スの姿が目に入った。イエスは〔彼らを〕憐れまれ、天の玉座から立ちあがり、彼らの下まで降りて行き、その貴い御手をさしのべられた。天使たちも彼を助け、四方から彼らを支えた。イエスはカルプに言われた。『手を伸ばしてわたしを打ち続けなさい。わたしは再び人間の救いのために苦しむ用意がある。わたしは喜んでそうしよう。ただ罪を犯す他の人びとが苦しんではならない。それとも汝は、神や人を愛する至福の天使らとともに居ることより、蛇とともに深淵に居ることの方がよいと思うのであろうか。よく考えてみるがよい。』以上がわたしの聞いたことである。わたしはこれが真実だと信じる。』⁽⁷⁸⁾ さてかくの如き聖なる義人が正当にも〔罪人の〕滅びを求めて祈りながら、天使の主〔たるイエス〕によって聴きいれられなかったとするならば、〔不当にも〕悪しき欲望のために祈り求めた悪臭を放つ犬であり、悪魔の如き不義の裏切者たる汝が、いかにして聴きいれられるというのであろう。神の使徒ヤコブが「汝らは求めても得られない。悪い求め方をするからだ」⁽⁷⁹⁾と述べているとおりである。〔以下も〕大いなる殉教者聖ポリカルプが見た幻である。彼は神の礼拝に混乱をもちこんだ異端にたいする滅びを求めて祈った。彼は立ったまま祈っているうちに、夢ではなくあたかも^{うつつ}現に、天使たちの主がケルビムの肩に座しているのを見た。また大きく口を開けた裂け目があった。そこでは大蛇が恐ろしい息づかいをしており、かの者らは犯罪人の如くに後手に縛られ、少しずつ裂け目の方に引きずられ、まさに落ちんとしていた。聖ポリカルプは憤慨のあまり身体中が熱くなり、イエスの甘き姿を見るのも忘れて、彼らが滅びゆく様に目を奪われた。そのとき天使らの主はケルビムの肩から降り、彼らの手を取り、自らの両肩をポリカルプに示して言われた。「ポリカルプよ、もし汝が望むなら、わたしを打ちなさい。わたしは以前にもこれらの者のためにわが肩

(78) 以上のカルプの夢に関する長い引用はディオニシオス・アレオパギタ（初代アテネ主教、パウロの弟子）に帰せられる（が実は5-6世紀に書かれた）僧侶デモフィロスへの書簡からのものである。（『Переписка』402; Fennell, 146-147）引用の始まる前に「主教ポリカルプに関し」云々とあるのは「主教カルプ」（クレタの主教か）とあるべきであるが、この引用文の次に続く別の引用文との関連で「ポリカルプ」と記されたのであろう。

(79) ヤコブ4:3

をさし出して傷をうけたからである。わたしはすべての者の悔い改めを願っているのである。」⁽⁸⁰⁾ このように聖なる義人が正当にも〔罪人の〕滅びを求めて祈りながら、天使らの主によって聴きいれられなかったとするならば、不当にも悪しき欲望のために祈り求めた悪臭を放つ犬であり、悪魔の如き裏切者たる汝が、いかにして聴きいられるであろうか。神の使徒ヤコブが「汝らは求めでも得られない。快樂のために用いようとして悪い求め方をしているからだ」と述べているとおりでである。だがわたしはわが神を信じている。「汝の病は汝の頭に帰るのである。」⁽⁸¹⁾

汝はまた尊きフョードル・ロスチスラヴィチ公のことに言及した。わたしも喜んで彼を裁きの場に迎えよう。たとえ彼が汝の縁者であったとしてもである。なぜなら聖人がたは死後もなお義を行うことを弁え、われらと汝の間が最初から今日に至るまでどうであったのかを見ておられるので、正しい裁きを行うことができるからである。汝らはまたわが妃アナスターシアをエウドキア⁽⁸²⁾に準えている。だが汝らの悪意に満ちた冷酷な策略と願望にもかかわらず、尊き

(80) 以上の聖ポリカルプに関する引用の出典は不明であるが、これはおそらく上のカルプに関する話と同じもののヴァリエーションであると思われる。つまりこのポリカルプはウストリャーロフやシュテーリンらが考えたように、キエフ・ペチェールスキー修道院の高名な掌院(12世紀)ではなく、上のカルプと同一人物であると考えられる。一体同じ話を雷帝がなぜ続けて記したのか理由は分らない。スクルインニコフやフェンネルはこの混乱を後代の写字生の責に帰しているが、ルリエーはこれを斥け、雷帝(ないしその助手)自身の判断によるものとする。この場合雷帝は二つの類似の話を選んで別ものと考えたのかもしれない。両者の間には本質的な相違点もみられるからである。(たとえば、前者ではカルプは異教徒の滅びを願い、後者ではポリカルプは異端の滅びを求めているのである。)最近キーナンは雷帝第一書簡の第一詳細版(すなわち本稿が底本としたテキスト)におけるこの箇所を問題として取りあげ、結局この混乱(と彼は考えるわけであるが)は原初版(キーナンは雷帝第一書簡の簡約版を原初版と考える)を改訂・増補するなかで生じたものとしている。(E. L. Keenan, *The Karp/Polikarp Conundrum: Some light on the history of "Ivan IV's First Letter"*, in: D. C. Waugh (ed.) *Essays in Honor of A. A. Zimin*. Columbus, Ohio, 1985, pp. 205 - 231; Keenan, *Apocrypha*, 9 - 10, 76 - 77)

(81) 詩篇7:16

(82) ビザンツ皇帝アルカディウス(在位383-408)の妃。コンスタンティノーブル総主教として日々彼女を非難した聖ヨアンネス・クリュソストモスを迫害した。興味深いことに、イヴァンが先にクールプスキーらを擬した宦官エウトロピオスもまたエウドキアの迫害を受けていた。前記注(70)を参照。

聖フョードル・ロスチスラヴィチ公は聖霊の働きによりわが妃を死の淵からひき戻したのではなかったか。⁽⁸³⁾ だから彼は汝らを助けているわけではない。むしろ至らぬわれらに憐れみを垂れたのであることはまったく明らかなのだ。そしてわれらは今日もなお彼が汝らではなく、われらの助力者であるようにと願っている。というのもこう言われているからである。「もし汝らがアブラハムの子であったなら、アブラハムの業を行ったはずだ。神は石ころからでもアブラハムの子を起こすことができる。アブラハムから出た者がすべてアブラハムの子とみなされるのではない。アブラハムの信仰によって生きる者がアブラハムの子なのである。」⁽⁸⁴⁾

われらは何もさかしらに考えたり、行ったりしてはいない。われらはかくも〔不安定な〕地面や階段に己が足場をおこうとは思っていない。それどころか力の及ぶ限り、確たる理性を追い求め、堅固な階段の上に己が足場をおき、しっかりと立っていたいと思う。

次に、自分から正教を捨て去った者を除いて、われらの下から追放された者は一人もいない。抹殺され監禁された者は、上に記したとおり、己の罪ゆえにそれにふさわしく報いをうけたのである。汝らは自分が無実だと言う。だがそれにより汝らは一層大きな悪を犯していることになる。悪事を働きながら、罪の赦しを得ようとはしないからだ。罪を犯すこと自体はそれほど悪いことではない。罪が犯されても意識されず、悔い改めもなされないとき、罪はもっとも深くなる。違法が法であるかのように主張されるからだ。彼らにたいする勝利をわたしが喜んでいるわけでは決してない。己の臣民が裏切るのを見て、彼らをその裏切ゆえに処罰したのである。これはむしろ悲しむべきことである。か

(83) おそらくアナスターシアがいつのことか聖フョードル・ロスチスラヴィチの遺骸により病を癒されたことがあったのだろうと思われる。

(84) 「アブラハムの子」に関する聖書からの引用（ヨハネ 8：39，マタイ 3：9，ロマ 9：7，ガラテヤ 3：7）はクリュチーフスキーの表現を借りれば、クールプスキーら貴族にたいする「歴史的脅迫」であった。雷帝はここで、貴族らに代る新しい支配階級、すなわちツァーリに奴隷の如く仕える忠実な家臣を、「石ころ」すなわち下層民から創り出すことを宣言しているように見える、というのである。オプリーチニナ導入の半年前のことであった。

くも邪悪な悪魔の理性にとりつかれて、彼らは神に授かった君主に万事において反抗したのであるから。己の裏切ゆえに処刑された者が主の玉座の傍に立つなど、いかにして可能なのであろう。誰も聞いたことはあるまい。

汝ら裏切者よ、もし汝らが義なくして叫び求め、そして得られないのなら、それはすでに記したように、汝らが甘き快樂を求めているからだ。

わたしは何も驕り高ぶって誇っているわけではない。実際誇ろうとはまったく思っていない。わたしはただツァーリの責務を果たしているだけであって、それ以上のことをしているのではない。むしろ驕り高ぶっているのは汝の方であらう。汝は下僕でありながら、祭司とツァーリの位を詐称し、教え、禁止し、命令を下しているからだ。われらはキリスト教徒の民に殉教の杯を与えんと画策などしてはいない。それどころか彼らのためにあらゆる敵を討つべく血を流し、死に至るまで苦しもうと望んでいるのである。だが臣民にたいしては善には善をもって報い、悪には手厳しき処罰をもって報いよう。欲するのでも望むのでもない。ただ必要によって、彼らの悪しき罪ゆえに罰もまたある。「汝は年老いてくると、両手をさしあげ、他の者に帯をしめられ、行きたくない所に連れて行かれるであらう」と福音書にあるとおりである。⁽⁸⁵⁾ 汝も見るように、違法を行う者はいつでも〔わが〕意に反して罰せられなければならないのである。わたしはまたおもねりへつらう追従者と一緒になって天使の姿を辱しめ、軽んずる者のことを知らない。汝らの邪悪な会議の残党こそそれではなかったか！ 汝らの仲間と助言者を除けば、われらの許には不忠義な貴族はいない。⁽⁸⁶⁾ 彼らは今なお悪魔さながらに、あらゆる狡猾な^{はかりごと}謀略を企み続けている。彼らについては預言者がこう述べている。「夜明け前に悪しき謀略を行い、光を追い払い、己の謀略のうちに義人をおおい隠そうとする者はわざわいである。」⁽⁸⁷⁾

(85) ヨハネ21：18

(86) クールプスキー第一書簡（本稿（Ⅰ）－119頁）ではイヴァンに「忠実な貴族」、すなわちイヴァンの霊と肉を滅ぼす者について言及されていた。これをイヴァンは「不忠義な貴族」に言いかえている。（クールプスキー第一書簡第二版では「不忠義な貴族」となっている。）

(87) イザヤ32：7か。

あるいはイエスが彼を捕えようとやってきた者たちに語った言葉も、彼らにふさわしい。「汝らは盗賊にむかうように剣や棒をもってわたしを捕えに来た。毎日汝らの前におり、教会で教えていたのに、汝らはわたしに手をかけなかった。だが今は汝らの時、闇の支配〔の時〕である。」⁽⁸⁸⁾ またわれらにはわが霊と肉を滅ぼす者もない。ここでも汝は子供じみたことを語っているのだ。それゆえわたしが幼児の如く汝らの意のままになることを拒絶したことをもって、迫害だと主張するのだ。自分はいつも主人で教師でありたいと願い、わたしは幼児というわけだ。だがわれらは神の憐れみに望みをおいている。なぜならわれらも受難にあわれたキリストの齢になったからである。⁽⁸⁹⁾ われらは神といとも浄き聖母そして全聖人の憐れみ以外に、人間から何かを教えてもらおうとは思っていない。多数の民を支配しながら、彼らから知恵を借りようとするのは好ましくないからだ。

汝はクロノスの神官についても記している。だが汝の書き方は不躰、まるで犬が吠え、蛇が毒を吐いているようだ。一体両親は子供にたいしかくの如く不適切に行うであろうか。ましてや理性を有すツァーリたるわれらが道はずれ、無作法を行うはずはないのである。汝はすべてを己が犬の如き悪魔の思いをもって書いている。

汝はまた己の書き物を汝自身とともに柩に入れるようにと望んでいる。まさに汝はキリスト教信仰の最後の一片をも捨ててしまったのだ。というのも主は悪に抗うなど命じられているのに、汝は知恵なき者ですら行っている当然のこと、すなわち究極の赦しを否定しているからだ。これでは汝には追善の歌も不要であろう。

わが世襲領であるリヴォニア地方の町ヴォロジューメル⁽⁹⁰⁾を汝はわが敵ジギモント王の町と呼んでいる。ここにいたって汝の犬の如き悪魔の裏切行為も見

(88) ルカ22：52-53

(89) キリストは受難のとき33歳になっていた。イヴァンも本書簡執筆のとき33歳であった。

(90) リヴォニアの町ヴォロジューメルすなわちヴォルメル（ヴォリマール、現ヴァルミエラ）は1559年以來ポーランド王ジグムント二世アウグストの領土となっていた（クールプスキー第一書簡、本稿（I）-119頁参照）。雷帝は全リヴォニアを自己の世襲領とみなしているが、その根拠は明らかにされていない。

事に花を咲かせたようだ。汝は王から豊かな恵みを得んものと望んでいる。汝にふさわしいことだ。というもの汝は神の右手の権威に服そうとはせず、神より授かったわれら、すなわち己の君主に服従し、聴き従うことを望まなかったからである。それどころか汝は勝手に一人だちしたいと願った。それゆえ汝は己にふさわしい君主を見出したのだ。彼は汝の犬の如き悪魔の欲望どおりに、自ら支配することがなく、もっとも卑しい下僕にすら劣っている。すべての者に命令され、彼自身が命令することはないからだ。だから汝が慰めを得ることはないだろう。そこでは各人がそれぞれ己のことで精一杯だからだ。孤児や寡婦の訴えですら受けいれられないのに、誰が汝を圧制者の手から守り、侮辱者から解き放つことができるだろうか。汝は自らキリスト教徒に災を願いながら、孤児や寡婦のために弁じているのだ！⁽⁹¹⁾

アンチキリストのことはわれらも存知ておる。だが神の教会に悪事を企てながら彼と同じことを行っているのは汝である。イスラエルの強者と流された血についてはすでに述べた。われらは何人も甘やかしているわけではない。むしろ汝らこそ反対するものの意見に耳を傾けず、追従を好んでいる。姦通により生れた議員が誰かわたしは知らない。むしろそれは汝らのなかにいる。モアブびととアンモンびととは汝のことである。彼らがアブラハムの甥口から出て、⁽⁹²⁾常にイスラエルに戦いを挑んだのと同様に汝も行っている。汝も支配者の一族に生れながら、われらにたいし絶えず滅びを企んでいるからだ。

一体汝が書いてきたのは何であったのだろうか。誰が汝を裁き主や教師にしたのだろうか。悪魔の奸計にならって威嚇し命令を下すとは、汝には一体どのよ

(91) 以上に雷帝はクールプスキーが頼りとしたポーランド王が専制君主でないことを軽蔑の念をもって説いている。孤児や寡婦に関する文章は聖書のいくつかの箇所（哀歌 5：3，詩篇82：4，イザヤ1：17，エレミヤ21：12）を想起させるが、実はここはクールプスキーの雷帝あて第一書簡と同じ頃に執筆された彼のプスコフ・ペチェールスキー修道院あて書簡の語句とほぼ一致する。雷帝は上の書簡をも読んでいたのかもしれない。クールプスキーはそこでロシアの聖職者が支配者（すなわちツァーリ）の前に「寡婦も孤児も」保護しないと非難したのであったが、雷帝はこれをポーランドにあてはめているのである。

(92) アブラハムの甥口はモアブ、アンモン部族（クールプスキー第一書簡の末尾に言及されている）の祖先（創世記19：30-38）。

うな権限があるのだろう！悪魔は狡猾にまた媚びるように、あるいは傲然とまた脅迫するようにふるまう。汝も同様だ。汝は常軌を逸して奢り高ぶり、権力者よろしくわれらを詰問する書簡を送ってきた。だが他方では汝はもっとも卑しい下僕や知恵足らぬ者の如くでもあった。われらの許から立ち去った逃亡者や愚にもつかぬことを口にする犬どものように、汝もまた己が犬の如き悪魔の裏切者らの欲望と策略によって理性を喪失し、猛り狂い、悪鬼さながらに落着きを失って書いてきたのであった。

それは預言者が次の如く述べるのに似ている。「見よ、主なる君万軍の主はユダとエルサレムから支えとなり頼みとなるもの、頼みとなるパン、頼みとなる水を取りさられる。すなわち猛き勇者、戦士、裁判官、預言者、占い師、長老、五十人長、秀でた顧問官、巧みな職人、分別ある従者を取りさられる。わたしは若者を彼らの頭とし、侮辱する者を彼らの支配者としよう。人びとは互いに虐げ、人は人を、人は隣人を抑圧する。子供が老人に、卑しき者が高貴な者に反抗する。そのとき人は己が兄弟や父の縁者をつかまえて言う。『汝は服をもっている。われらの^{かしら}頭になって下さい。わが食物を汝の裁量に委ねよう。』その日彼は答えて言う。『わたしは長にはならない。わが家にはパンも服もないのだから。わたしはこの民の長にはならない。』かくてエルサレムは見捨てられ、ユダは荒らされ、その民は不法を行って主に聴き従うことがない。それゆえ彼らの栄光はその輝きを失い、彼らの顔の恥は彼らを告発している。彼らは己が罪をソドムの罪と公言し、隠すことがなかった。彼らの霊はわざわいだ。心のなかで狡猾な^{はかりごと}謀略を企て、『義人に縄を打とう。われらに義人は要らない』と言ったからだ。彼らは己が行いの果実を食べる。不法なる者はわざわいだ。彼らは己の手の行いゆえに災難にあうだろう。わが民よ、汝らの指導者は汝らを刈り、苦しめ、支配する。わが民よ、彼らは汝らを甘言で欺き、汝らの歩む道を混乱させる。だが今や主が裁きの場に立たれ、己が民を裁きの場にすえられる。主御自身が民の長老と己が司たちとともに裁きの場に出られる。』⁽⁹³⁾

アレオパギタは僧デモフィロスにたいしさらに次のように書いている。⁽⁹⁴⁾

(93) イザヤ3：1-14

「だがデモフィロスであろうと他の誰であろうと、もし善に敵対するなら、当然のことながら罰をうけ、何が善であるかを学んで初めて祝福されるのである。というのも善人であれば、滅びにおちた者が救われ、死者が生命を得ることを喜ばぬはずはないからである。それゆえにこそ彼はようやく放蕩の道から戻った者を己の肩に乗せ、善き天使らを祝いの席に招き、恩を知らぬ者に善をはかり、邪な者にも善人にも太陽を昇らせ、彼の許を去ろうとする者のために生命を投げ出すのである。だが汝は、汝の書簡からも明らかなように、司祭の前に跪いた者をも不信仰者また罪人と呼び、彼らを拒んだのである。わたしには汝がどうしてそれほど高ぶるのか分らない。その男は罪の赦しを求めて祈り、かつ告白したのであった。だが汝は驚きもせず、かえって善き司祭が悔い改めた者を憐れみ、不信仰者に正義を示したと言って激怒し、侮辱した。最後に汝は同輩と一緒にこの司祭にたいし『出て行け』と言って、不当にも至聖所に駆けこみ、もっとも聖なる事物に被いをかぶせてしまった。そして汝は冒瀆しようとする者から聖事物を守り、今なお守り続けている、とわれらに書いてきた。だがわれらの言うことをよく聴くがよい。汝ら召使いや汝と同じ下僕らが司祭を罪あるものと非難するのは正しいことではない。たとえ彼が神の事物を正しく崇めていないように思えても、また何か禁止された事柄を行ったことが明らかになったとしてもである。というのも神の聖なる領域を離れ、神の戒律を破ることが混乱や無秩序であるとするならば、神の名において神が定められた序列を破ることは無意味であるからだ。神は分かつことのできない全き方である。そうでなければ神の国は立ち行くことができないであろう。またもし聖書にあるように神の裁きが存在し、司祭がその使者で預言者、また高位聖職者に次ぐ神の摂理の解釈者であるならば、汝は司祭らにより神の僕にふさわし

(94) 以下の長い引用はディオニシオス・アレオパギタのデモフィロスあて書簡（上記注(78)参照）からのもの。引用文中には聖書に関わる引用、故事への言及、言いまわしの借用等が多数ある。主な箇所を順に記すと、マタイ12：25、歴代志下26：16-19、サムエル上13：8-15、マルコ3：11、ヘブル9：7、民数12：10、使徒19：14以下、エレミヤ23：21、イザヤ66：3、マタイ7：22-23、Ⅰテモテ3：5、ルカ16：10、エレミヤ2：13、ヘブル7：26、マタイ18：32、ルカ9：51以下、ヘブル4：15、マタイ12：19（イザヤ42：2）、サムエル上1：3、Ⅱテモテ2：24-25

き身とされ、時が至れば彼らを介して神の摂理を立派に学ぶことになる。このことはまた聖なる規範が主張するところではないだろうか。なぜなら至聖所に近づきうるのは普通の人びとではなく、特別な人びとであるからだ。まず聖礼典を執行する高位聖職者、次に司祭、さらに輔祭である。神の僕とされた者、すなわち修道僧らは、彼らがそこで叙任された至聖所から扉で遠ざけられている。彼らは扉の前に立つが、それは至聖所を守るためではなく、身分にふさわしく自分が司祭よりは一般人に近いことを認識するためなのである。それゆえ聖職者の位階規定により神の聖餐には他の者、すなわち至聖所の内奥にある者を通じて与るべきなのである。というのは彼らは神の姿〔聖職者〕にふさわしく常に祭壇の前に立ち、彼らに明らかに示された神の〔機密〕を見、聴くからである。それから彼らは品位あふれる姿となって神の帷のなかから現われ出で、神の従順な僕や聖なる会衆、聖別されんとする者らに聖なる〔機密〕を正しく示すのである。それは汝が〔至聖所に〕荒々しく駆けこみ、もっとも聖なる事物を無理野理に開けさせて取り、自分がそれらを守っているのだと主張するまでは、浄らかにしっかりと守護されていたのである。ところが汝は司祭に属すべきものを見たことも聞いたことも手にしたこともなく、聖書の言葉の真理を理解することもないままに、日々聴衆に説教しては惑わしている。誰であろうとツァーリの命令なしに民にたいする支配権を握り、行使するならば、当然処罰をうけるであろう。また民を裁きあるいは赦す公の前に彼の臣民の一人が大胆にも進み出て、裁きを始めたとしたらどうであろうか。それどころか公を侮辱し、同時に追放しようとしたらどうであろうか。ああ人よ、汝は柔和な善良なる聖職者とその戒律をひどく軽んじている。それゆえ誰でも己の地位以上のことを行う者にたいしては、たとえそれが立派に行われたように思われても、同じことが言われなければならない。それは権限外のことだからである。一体ウジヤは神に香を焚こうとして、いかに己の職分に反したことであろう。また犠牲をささげたサウルはどうであったか。心底からイエスを称えた迫害せる悪霊どもはどうであったか。すべて司祭〔職〕に無縁な者は神の言葉によってこれを禁じられているのである。各人はその地位に応じて己の職分を果すべきで

あり、ただ大祭司だけが至聖所に年に一度、しかもすべて定められた通り、聖職者の浄らかな姿となって入るのである。彼らは聖事物に被いをかぶせるが、レビびとはこれにふれてはならない。さもないと彼らは死んでしまうだろう。主は不遜なるウジヤに激しい怒りを顕わされた。マリヤ〔ミリアム〕は立法者〔モーセ〕に律法を与えんとして癩病になった。またスケワの子らには悪鬼が飛びかかった。主は『わたしは遣わさなかったのに、彼らは走った』と言われた。また『わたしは告げなかったのに、彼らは預言した』とも、さらには『不信仰者は犬を殺すように子牛をほふり、わたしにささげた』とも言われた。手短かに言うならば、神のまったき法は無法者を容赦しないのである。もし彼らが『われらは汝の名において幾多の力ある業を行った』と言うなら、主はこう答えられるであろう。『わたしは汝らを知らない。不法を行う者よ、わたしから離れよ。』それゆえ聖書にもある如く、たとえ正しいことでも身分不相応の事を行ってはならない。誰でも己のことにのみ留意し、高すぎることも深すぎることも考えてはならない。ただ命じられた職務のみを思いなさい。だが、と汝は言うであろう。はたして人に尊敬されずに非難されている身分不相応な司祭らは、責められるべきではないか。法に違反し神を辱しめながら、法を誇ることができるであろうか、と。さらに、そのような司祭がなぜ神の解説者でありうるのか。自らその力を見ずして、いかにして神の奇しき御業を宣べ伝えることができるのであろうか。あるいは闇の存在がいかにして照らしうるのだろうか。自ら神の聖霊の存在を真に信ずることがなくて、いかにしてそれを説きあかすことができようか、と。これにたいし今度はわたしが汝に答えよう。というのも汝デモフィロスに敵ではなく、またわたしは汝がサタンに欺かれるのを見すごすことができないからだ。一体神に近い聖職者は誰でも遠くにある者より神にふさわしいし、真理の光に近ければ近いほど自らも輝き、他人をも照らすのである。近いということを場所的に理解してはならない。神に受け入れられやすい資格ととるべきである。もし司祭の職分が啓蒙することにあるとしたら、啓蒙できない者が司祭の位と権限を失うのは明らかである。自ら啓蒙されていない者については言うまでもない。それゆえ司祭の務めを果たしなが

ら、畏れることも恥じることもなく神の礼拝を執り行い、彼自身が心に抱いていることには神も気付かれまいと高を括り、神を父と呼んで欺こうとし、大胆にも神の様々な標徴しるしに冒瀆の言葉を浴びせかけ（というのもそれを祈りの言葉とは到底言えないだろうから）、キリストの如くに語ろうとする者は、わたしには不遜な者のように見える。これは司祭ではなく、人を欺く邪な者、自分をそしめる者、神の民を襲う羊の皮を着た狼である。だがこれを正すのは汝デモフィロスの務めではない。もし神の言葉が正当なことを正当に行うよう命じているとするならば（正当なことを行うというのは、各人にその分に応じて割り当てることを意味する）、誰であろうと正当に行わなければならない。なぜなら天使にたいしてすら正当に、すなわち分に応じて割り当て、きちんと区分しなければならないからである。だが、ああデモフィロスよ、そうは言ってもこれはわれらが割り当ててるのではない。むしろ神が天使を介してわれらにそうされるのである。天使にはさらに高位の天使を介して行われる。要約するならば、存在するすべての者において第一の者が、この上なく正しき神の摂理の意をうけて第二の者にその分に応じて割り当てるのである。他の者を支配するように神に命ぜられた者は、その部下や臣民に各人の分に応じて報いるのである。それゆえ汝デモフィロスも言葉と怒りと欲望⁽⁹⁵⁾をそれぞれの機能に応じて区分すべきである。そして己の品位を貶めてはならない。上位の言葉をもって下位〔の機能〕を統御させるべきである。

市場において奴隷が主人を、若者が老人をあるいは子が父を侮辱し、そればかりか飛びかかって傷を負わせるのを目撃した場合、駆けつけて目上の者を助けるのでなかったら、たとえ彼らの方が辱しめたのであったと仮定しても、われらは名誉を失うことになるだろう。一体われらは怒りと欲望が言葉を辱しめ、神から〔言葉に〕与えられた優先権が奪われるのを黙認し、他方自分自身のうちには不信、不正、無秩序、不和、混乱の念を抱いたとしたら、われらは恥じないでいられるだろうか。神が任命したわれらの至福なる立法者は、己の家を立

(95) Fennell 167によればディオニシオスはここで $\lambda \omicron \gamma \acute{o} \varsigma$ (言葉, 理性) $\theta \upsilon \mu \acute{o} \varsigma$ (心, 靈魂), $\epsilon \pi \iota \theta \upsilon \mu \acute{i} \alpha$ (欲望) の人間の内面の三機能について述べているという。

派に治めることのできない者が神の教会を治めることができるとは、当然のことながら考えないであろう。なぜなら己の病を癒す者は他人の病をも癒すであろうし、他人を癒す者は家も、町も癒すであろう。そして町を癒す者は民をも癒すであろう。手短かに言えば、聖書にもある如く、『小事に忠実な者は大事にも忠実である。小事に忠実でない者は大事にも忠実でない』のである。だから汝は欲望と怒りと言葉のそれぞれにふさわしい役割を与えるべきである。同様に汝自身については神の従者である輔祭が、輔祭には司祭が、司祭には首司祭が、首司祭には使徒とその後継者が〔責任を負うべきである。〕もしこれらの者のいずれかが己の資格を越える罪を犯した場合、それを正すのは同じ職分の聖者であるべきであり、一つの職分が他の職分に干渉すべきではない。誰でも己の職分と責務に留まるべきである。己の務めを知り、それを果すべきことに関して、われらが汝に伝えようと思うことは以上の如くである。かの人物を不信仰で醜悪な男とよぶ汝の人間にあるまじき態度に接して、わたしはわが愛する者にたいするこの仕打ちをどう悲しんでいいのか途方に暮れている。汝はわれらによって立てられながら、一体己を誰の僕だと思っているのだろうか。もし汝にとってあらゆる善が、またわれわれ自身が不要であるのなら、そしてわれらの神への礼拝が汝にはまったく無縁だというのなら、汝もそろそろ他の神と司祭を探し求めるがよかろう。そして完全な人間になるのではなく、彼らにならって野獣の如くなり、汝が望むどおりに無慈悲の残忍な僕となるがよいのだ。一体われら自身がいつ全き聖人の域に達したというのであろうか。われらには神の人間愛はもう不要なのであろうか。それともわれらは、聖書に言われているように、不信仰者にならって二重の罪を犯しているのではなかろうか。自分自身どこで躓いているのか分らずに、自分が正しいと思い、真理が分らないのにそれを見たと思っているのではなかろうか。これには天も驚愕し、わたし自身も信じられずに慄いた。もしわたしが汝と交わることがなかったら(本当にそうであったらよかったのだ!),すなわち汝の書簡に接することがなかったら、わたしは汝デモフィロスが、万人を恵む神のことを人間を愛す神でないなどと考えていようとは思わなかったであろう。たとえ他の者らが汝を見てそ

う信じるのが妥当だと考えたとしてもである。だが汝は憐れみ、救う神を必要としていないばかりか、司祭らからその位を剝奪しようとしているのだ。しかしこの司祭がたは信仰により人びとの無知の罪を己が身に負い、憐れみ深き神〔の業〕を行うにふさわしき身とされており、自らが弱き存在であることを十分に弁えておられるのである。これにたいし神の最高の大祭司〔イエス〕は別の道を歩まれた。彼は聖書に記されているように、自らは罪人と区別されながら、その愛において範を垂れ、羊の群をやさしく養われたのである。それゆえ彼は同じ奴隷仲間の負債を赦してやらなかった男を邪悪な人間と呼び、この男を裁いて当然の罰を与えるのである。自らがあふれるほどの温情にふれながら、彼は他人には一片の同情をも示さなかったからである。だからわたしもそうだが、汝デモフィロスもこれには十分気をつける必要がある。彼は苦難の最中に彼を辱しめた者たちのために父の赦しを求め、彼を追放したサマリヤびとを容赦なく裁くべきだと考えた信仰薄き弟子たちを叱ったのであった。これこそ汝が己の喧しく粗暴な書簡において、いたる所で何度も繰り返しているところだ。汝は己のためではなく神のために悪を懲らしたと主張する。だが言ってもらいたい。善のために悪をもって懲らしたのであろうか。引きさがるがよい。われらの大祭司はわれらの弱さを赦すことのできぬ方ではない。それどころか彼は柔和で憐れみ深い。彼は大声で呼ぶことも叫ぶこともなく、穏やかにわれらの罪を浄められる。だからわれらは汝がたとえ何万遍ピネハスとエリの名を引き合いに出そうとも、汝の好ましからざる主張を受け入れるわけにはいかない。というのもかつてイエスがこれを弟子たちから聞かされたとき、彼は温和で善き霊を忘れていた彼らを咎められたからである。われらの尊き神の教師も神の教えに敵対する者を穏やかに諭している。無知な者にたいしては教えるのであって、苦しめるべきではない。同様に目の見えない人をもわれらは苦しめず、導くのである。ところが汝は光に向い始めた男の顔を打って拒絶した。また腰を低くして近づいてきた恥を知る者を手荒く追い出した。まさに戦慄すべきことではなからうか。主なる神、キリストはこのような者が山をさ迷い歩くのを捜し求め、遠ざかろうとするのを呼びもどし、見出しては肩に乗せられた

のである。それゆえわたしは祈ろう。われらが自分自身にたいしひどい^{はかりごと}謀略をなしたり、自ら剣をつきたてたりすることのないようにと。というのも他人に辱しめを与えんとする者も、逆に善を施さんとする者も、必ずしも望んだ通りには行わないのが通例だからである。彼らは心に悪意あるいは善意を抱こうとしながら、逆に神の恩情あるいは激しい情欲に囚えられてしまうのである。ある者は善き天使の相続人また同伴者であり、地においても天においても常に平和で、あらゆる悪から自由である。彼らは常しえに清福なる平安を相続し、永遠に神と共にあるであろう。これこそ至幸というものであろう。これにたいし別の者たちは神の平和とともに己の平和をも奪われ、この世においてもまた死後も狂暴な悪鬼とともにあるだろう。それゆえわれらは常に主なる善き神とともにあらんと願い、悪人とともに義の神から断ち切られることのないようにと精一杯努めているのである。わたしは〔わが罪業に応じた〕当然の罰が下されるのをことのほか恐れており、あらゆる悪行に関わることのないように祈っているのである。』

さて以上のことは汝にもあてはまる。汝は教師の位につこうとしたからである。だが神の使徒パウロはこう語っている。「見よ、汝はユダヤ人と称し、律法に安んじ、神を誇り、御旨を知り、律法に教えられて善事を弁えており、さらに自ら盲人の手引き、闇にある者の光、愚かな者の導き手、幼児の教師たらんと願い、律法のうちに真に理性が具現化していると考えている。それならばなぜ汝は他人を教えながら、自分を教えないのか。盗むなど教えながら、自分は盗むのか。姦淫するなど教えながら、自分は姦淫するのか。偶像を嫌いながら、聖物を盗むのか。汝は律法を誇りながら、律法に反して神を立腹させている。神の名は汝らのゆえに異教徒の間で汚されているのである。」⁽⁹⁶⁾ 神の僕グレゴリオスも次のように述べている。⁽⁹⁷⁾ 「わたしは人の生命がはかなく、その肉体が朽ちやすいことを認めよう。それゆえ〔洗礼を〕受けいれよう。それは

(96) ロマ 2 : 17-24

(97) 以下にナツィアンのグレゴリオスの説教からの引用が続く。雷帝はすでに二度この説教から引用している。(上記注(30), (58)を参照) ここにも聖書からの引用が多数ある。(ヘブル 5 : 2, マタイ 7 : 2, 8 : 17, 9 : 13, 18 : 22, II コリント 2 : 7, I コリント 7 : 9)

善きことだからだ。わたしはこれを許す者を崇拜し、これを他の者に伝え、憐れみを示そう。なぜならわたしは自分が弱き存在であること、また自分が他人を測るその物差で自分も測られるであろうことを知っているからだ。これにたいし汝はどう言おうとするのだろうか。汝はどのような法を定めようというのだろうか。ああ新しきパリサイびとよ、汝の名は清くとも心はそうではない。汝も同様に弱き身でありながら、われらにはノヴァティアヌスの教えを伝授した。一体汝は悔い改めを認めないのであろうか。泣いてはならないというのだろうか。汝は涙を流さないのではあろうか。汝自身が同じ様に裁かれることのないように！汝は恥ずかしいとは思わないのであろうか。人を愛されたイエスはわれらの弱さを受けいれ、病を負い、義人を招くためではなく、罪びとを悔い改めに導くために来たり、犠牲^{いけにえ}よりは憐れみを喜び、罪を70の7たび赦されたのである。汝の誇り高き心は、もしそれが純粹であったなら、何と幸いであっただろう。傲慢にも律法を人間に優先させるのでなかったら、また人を絶望に落としこむような過酷な矯正でなかったら〔何と素晴らしかったであろう。〕というのも矯正を伴わない赦しも、赦しのない非難も共に誤りであるからだ。これでは手綱をまったく放したり、逆にあまりに強く絞ることになる。心が清らかであることをわたしに示しなさい。そうすれば汝の不遜を受けいれよう。だが今やわたしは、汝がわたしに不治の膿を移すに留まらないのではないかと恐れている。汝は悔い改めたダビデを受けいれないのであろうか。悔い改めのゆえに彼には預言の才が与えられたのである。救い主の受難のときに人として苦しんだ大いなるペテロはどうであらう。イエスは三度の問いにたいする三度の否認にもかかわらず、〔罪の〕告白ゆえに彼を受けいれ、癒されたのである。それとも汝は血をもって生命を全うした方を拒もうというのだろうか（汝はそれほど愚かなことを言い立てている）。コリントの律法違反者はどうか。パウロは改悛の認められた者に愛を保証した。それはその者が無数の禁制の重みで悲しみにうちひしがれることのないようにと願ってのことである。若い寡婦は誘惑にあいやすいからといって、嫁いではないのだろうか。パウロはこれをあえて許している。これにたいし汝は彼の教師であるらしい。汝は第四の天に

に達し、もう一つの天国を見、未知の事柄を聞き、あまねく世界に知らせたようだ。「〔パウロが許したのは〕すでに受洗した者にたいしてではなかった」と汝が言うのなら、証拠を示すべきである。さもなければ裁くのは止めるべきだ。もしはっきりしないのなら、人間愛を優先させるべきである。一体わたしにとってノヴァティアヌスの人間憎悪の法は何の意味ももたない。彼は第二の偶像崇拜である金銭欲を否定しなかった。他方淫欲にたいしては、〔自らが〕肉も身体ももたぬ者であるかの如く、厳しく裁いたのである。』

さらに預言者ダビデも次のように述べている。「神は罪人に言われた。汝は何ゆえわたしの定めを語り、わたしの契約を口にするのか。汝は教えを憎み、わたしの言葉を斥けた。汝は盗人を見れば彼とともに行き、姦淫する者の仲間に加わった。」⁽⁹⁸⁾ もっとも汝は肉の姦通者ではない。だが裏切の姦通者も肉のそれと同類である。汝もまた裏切者の仲間に加わっているからだ。「汝の口は悪を増し加え、汝の舌は虚偽を仕組む。汝は座して己が兄弟をそしり、汝の口は己の母の息子に誘惑の言葉をかける。」⁽⁹⁹⁾ 汝のこの兄弟と母の息子は皆キリスト教徒である。皆同じ洗礼盤で洗礼をうけ、皆天から生をうけたからだ。「汝がこれをなしたとき、わたしは黙っていた。そこで汝は不当にもわたしを汝と同等の者と思った。だが今やわたしは汝の罪を明らかにし、汝の顔の前に汝の罪を並べよう。神を忘れる者よ、このことを思いなさい。さもなければわたしが汝を捕えるそのときに、誰も汝を救う者はいないであろう。」⁽¹⁰⁰⁾

(98) 詩篇50：16-18

(99) 詩篇50：19-20

(100) 詩篇50：21-22

(101) すなわち1564年

(102) 以上でイヴァン第一書簡は終るが、脱稿後、『イヴァン雷帝とクールプスキー公の往復書簡』全体のテキストの新たな刊本を入手した。Памятники литературы древней Руси. Вторая половина XVI века. М. 1986, стр. 16-107である（偶数ページにテキストが印刷され、奇数ページには現代語訳が付されている。）。ただしイヴァン第一書簡に限って言えば、相当程度の省略がある。テキストは基本的には本稿の底本（Переписка, стр. 12-52）と同じである（つまりГПБ, собр. Погодина, No. 1311本—いわゆるB写本）が、Е. И. Ванееваにより他の写本（いずれもПерепискаの校訂者、Я. С. Рюриер—にも知られていた）と新たに校合され、若干の点で新たな読みが採用されている。しかし本稿ではこれを十分に考慮に入れることはできなかった。

以上は断乎たる指令の書である。全ロシア正教帝国の都モスクワ、〔天国への入口の〕尊き敷居にて。世界開闢紀元7072年⁽¹⁰¹⁾ 7月5日。⁽¹⁰²⁾